

フランス地域民主主義の現状

—2002年、2003年の市長インタビューから 4—

鈴木 礼 暁

II 2003年のインタビュー

本号では、2003年のインタビューのうちカルカソンヌ、モンターバン、アルピ、ヴィシー、パリ16区、ベール、カンペールの7コミューンでのインタビュー内容を報告・考察する。2003年の訪問コミューンの一覧など、概要は「札幌法学」第16巻2号(30頁～33頁)で示した。

II-2-⑱ カルカソンヌ (9月9日12:35～13:40)

◎カルカソンヌ

カルカソンヌはラングドック-ルーシヨン州オード県の主邑で、海拔111メートルに広がる6,508ヘクタールの市域に46,216人の人口を有している。

・起源

紀元前6世紀にカルカソンヌの文明の最初の跡が見られる。考古学的調査により、oppidum(丘城)の遺跡が見つかった。紀元前300年頃に、中央ヨーロッパからきた民族で、トゥールーズを拠点としたLes Volques-Tectosagesがラングドックのイベリア人を服従させ、カルカソンヌに居住した。この民族についてはあまり知られてはいない。かれらは穀物を耕作し、その実は往復式もしくは円形の臼で粉にされていた。かれらはヤギ、羊、豚を飼育し、森で鹿、い

のしし、小さな鳥獣を捕獲していた。

・ローマ期と蛮族の侵入

紀元前 122 年に、ローマ人がカルカソンヌに征服者として定住し、ナルボンヌ地域のみを統治した。カルカソンヌはプリニウスの記録にもとづけば、ユリア・カルカソの植民地であった。同 70 年にカルカソンヌは気品のある、選ばれた都市に位置づけられた。Domitia 街道の街として、カルカソンヌは、取っ手付き壺とセラミックの交換物としてコルヌアーユから来るワインと錫の交易路の周りに広がっていた。

350 年にフランク族が街を占領したが、すぐにローマ帝国に奪い返された。この時期にフランク族による大規模な侵攻が続き、街に恐怖が押し寄せ、防衛を強化することが急務となった。このことは西ゴート族が 407 年にナルボンヌの土地を、436 年にカルカソンヌを領有する妨げとはならなかった。それは、テオドリックを王に戴く西ゴート族の大規模な占領であった。西ゴート族はプロヴァンス、アキテーヌ、セプティマニ(現ラングドックールーシヨン)に広がった。508 年に、クローヴィスが西ゴート族に対抗して活躍し、トゥールーズと、西ゴート族の王であったアラリクが 410 年にローマ軍から略奪していた宝物を略取した。

・中世

11 世紀にこの地で封建制が開始した。1082 年にアルビ、ニーム、ベジエを所領とする子爵であったトランカヴェルが、バルセロナの館の見返りに、カルカセとラゼの継承権を買い取って、カルカソンヌの子爵と称した。この時期カルカソンヌは繁栄し、豊かであった。巡回商人の通行税が引き上げられ、しばしば彼らの商品額の半分にまで及んだ。この時期に新しい宗教、カタリ派が入り、カルカソンヌで多くの信徒を得た。

1096 年に教皇ユルバヌス 2 世がサンナゼール寺院の建設に使われる資材を祝福した。1130 年に城が建設され、ガロ-ロマン期の壁の修復がなされた。1209 年 8 月にカルカソンヌがカタリ派に対抗する

十字軍の居留地となり、15日間の戦いの後、レイモン・ロジェ・トランカヴァルがシモン・ド・モンフォール（父）に屈し、獄中で赤痢により没した。1248年にカルカソンヌは王領となり、長期の戦争を望まないサンルイが2番目の壁を建設して防衛を強化し、今日の旧都市（シテ）の状態になった。カルカソンヌでは、住民の帰還と、シテの外部に町を建設することが認められ、サンヴァンサンとサンミシエルの2つの教区となった。

このあとシテは大きな変貌を遂げた。フィリップ3世はアラゴン王との戦いに際して、父の事業を継続した。ナルボンヌ門などガロロマン期のいくつかの塔の修復などを行なった。カルカソンヌはその後不落の居城とみなされた。実にシテは以後攻撃されたことがなく、1355年にラングドックがエドワード黒太子に屈した時に、征服者に門を開けたのが始めてであった。黒太子はシテ城外の下町部分を焼き払った。

・中世都市の復旧

1802年にカルカソンヌに正式な遺棄が発せられた。軍事独裁政府が無用な負担を手放したのである。サンナゼールとサンセルスの寺院は聖堂に過ぎなくなり、司教は城外下町のサンミシエルに居住した。人は胸壁の銃眼から落ちてくる石を、城壁の壁のあちこちで小さな建物を造るために利用した。塔の屋根は破損し、これらの塔の幾つかは物置き、酒蔵、作業所になった。ジャン・ピエール＝クロメルヴィエーユがシテを破壊から救った。彼やメリメ、とくに建築家のヴィオレ・ル・デュックのおかげで、カルカソンヌの中世都市は“美術品行政部”の管理下におかれるようになった。はやくも1844年にサンナゼール教会によりモニュメントの修復が始まり、1853年には要塞の補修作業が始まった。現在シテの建造物全体の15%が修復されている。1879年のヴィオレ・ル・デュックの死後は、彼の弟子であるボスウィルワルド、続いて建築家ノデが修復に取り組んだ。

1997年に、シテはユネスコの世界文化遺産に登録された。⁽¹⁾

◎レイモン・シェザ市長 Raymond Chésa

レイモン・シェザ市長は 1937 年生まれで、物理学、化学の教授歴がある。UMP (RPR) に所属し、1982 年から 92 年までオード県の県議会議員、1983 年からカルカソンヌの市長として 4 期を務めている。ほかにラングドック-ルーシヨンの州議会議員、1993 年から 99 年までヨーロッパ議会議員、カルカソンヌ都市共同体の議長も務めている。また、市長の闘牛趣味が高じて、2002 年以後カルカソンヌ市街で闘牛競技が開催されるほどになった。訪問時 (2003 年 9 月) にシェザ市長は病院に通いながら激務をこなしていたが、2005 年の 1 月任期を約 2 年残して死去した。シェザ市長は UMP の重鎮の一人としてだけでなく、私人としてジャック・シラク大統領との間に厚い親交があった。シェザ氏の死去の翌日シラク氏は、“勇気にあふれ、討議を重んずる人士” の死は “大きな悲しみ” であり、“協調心と友好の情、交感の情にあふれた人物であるレイモンは、我々の心に居つづけるであろう” という談話をエリゼで述べた。

シェザ市長の死去を受けて、UMP (UDF) のジェラルール・ララ Gérard Larrat 第一助役が市長になった。ララ新市長はシェザ市長と党派は異にするが、信頼が厚く、1999 年にシェザ市長の闘病中の 9 ヶ月間、同市長の意向を受けて市長代行をしていた経緯がある。⁽²⁾

インタビューに応じてくれたのは、シェザ市長、フランソア・マルカユー財政担当助役、ジャン-ノエル・クルーゼ市長室長であったが、市長は後半に登場し 1 部の質問にだけ答えてくれた。またイ

(1) カルカソンヌについては次によっている。

<http://perso.wanadoo.fr/bbcp/francais/cite/histoire/hist.html>

<http://www.carcassonne.org/carcassonne2.nsf/agcGeneral?OpenFrameSet&Frame=Contenu&Src=/carcassonne2.nsf/pgeIntroPatrimoine?Openpage>

<http://www.quid.fr/communes.html?mode=detail&id=18294&req=Car&style=fiche>

(2) シェザ市長については次によっている。

http://www.journaldelemploi.com/fil_info_article_region.php3?id_article=469

インタビュー後、マルカイユー助役と昼食を共にして補足的な情報を得ることが出来た。なお、マルカイユー助役は現在ララ市長のもとで第1助役の任にある。また、シェザ市長の娘イザベル女史は以前から都市計画担当の助役であったようである。⁽³⁾

A-2001年選挙

マルカイユー財政担当助役らは、“社会党、共産党の連合に対して、共和国連合、民主連合の共同により、1983年以来シェザ市長が4期目に入っている”ことに触れたが、その意義や評価についての説明がなかった。また、マルカイユー助役は“40%の市長が国政に出ていない”と指摘し、市長の責任の重さ、任務の多忙さなどを示したかったのであろうが、40%という数字の母数や責任の重さのコミューン規模による相違などについて、明示されず、意味の掴みにくい表現であった。

仮に大規模市に関しての説明であるとした場合、逆に60%が国政に参加しているという意味に取れるし、また、シェザ市長自身ヨーロッパ議会議員の経験もあることから見て、マルカイユー助役の指摘には疑問が残る。

マルカイユー助役は選挙について簡単に触れただけなので、他の情報から補足しておこう。第1回投票では有権者数29,011人、投票数19,453票(67.05%)、有効投票数18,463票(63.64%)で、シェ

またシェザ市長の死去に関して、セナの議長であるクリスチャン・ポンスレの弔辞などが次のURLで見られる。

http://www.senat.fr/presidence/hoteldeville_rieux_minervois.html

<http://66.102.7.104/search?q=cache:NGr5YsRLeSgJ:www.pyreneesmagazine.com/Actu/index.htm%3FRPOS%3D6+G%C3%A9rard+Larrat&hl=ja>

ララ新市長については次によっている。

<http://www.lexpress.fr/info/region/dossier/carcassonne/dossier.asp?ida=433330>

(3) カルカソンヌの議員名簿は次のホームページで見ることが出来る。

<http://www.carcassonne.org/carcassonne2.nsf/agcGeneral?OpenFrameSet&Frame=Contenu&Src=/carcassonne2.nsf/pgeIntroVisiter?openpage>

ザ氏の率いるリストが 8,763 票 (47.46%)、社会党のタルリエ氏のリストが 7,936 票 (42.98%)、FN のモリオ氏が 1,764 票 (9.55%) であった。第 2 回投票では投票数 20,480 票 (70.59%)、有効投票数 19,572 票 (67.46%) で、シェザ氏が 10,417 票 (53.22%)、タルリエ氏が 9,155 票 (46.78%) という結果であった。⁽⁴⁾

B-パリテ

マルカイユー助役は“法に賛成”であるが、“それが、別の生き方(手法)であり”、唯一ではないとし、その理由として、“カルカソヌでは 20 年来第 1 助役が女性であり、パリテを実施済みである”ことをあげていた。これは、全体としての女性の政治参加をパリテのシステムによって求めるということとは異なるもので、第 1 助役に適合する女性議員がおり、パリテの発想の一部を、すでに取り入れているということを示すに過ぎないものであろう。シェザ市長およびマルカイユー助役にあって、パリテ法を積極的に評価し、適用しようとする姿勢があったのか否かについて疑問の起こるところであるが、ここでは踏み込めない。なお現在の第 1 助役は前記のようにマルカイユー氏自身である。また、11 人の助役のうち男性がマルカイユー第 1 助役を含め 4 人であるのに対し、女性は 7 人である。⁽⁵⁾ なお、シェザ前市長の第一助役はララ現市長であったのだから、不可解な説明である。

マルカイユー助役らは女性候補者の名簿登録に当たって、“彼女らの評判と実績”にしたがって選んだとしている。また、県議会(オー

(4) 2001 年のカルカソヌでの市議会議員選挙の結果については、次に見られる。

http://elections.figaro.net/cgi/histo_req1?page=0&offs=0&action=M2001&re=&dep=11&Valider=+Lancez+la+recherche&version=figaro

(5) カルカソヌ市議会における役職配置等は次に見られる。

http://www.carcassonne.org/carcassonne2.nsf/agcGeneral?OpenFrameSet&Frame=Contenu&Src=_e5thm2sj3c5pn6rredpij4bjeedj2utjlclq6it3icknk8rr3apknscsj585n6stb1d5p6abae68o30d9k6gojachi6cs38clv9to6ari4dthnarb5dpq00_

ド県)においてはパリテが実現されていないが、2004年の州議会(ラングドック-ルーシヨン州)においてはそれが果たされるであろうと期待していた。現在オード県議会の定数は35人であるが、女性は3人で(ナルボンヌ東カントン、ナルボンヌ西カントン、テュシャン)、8.5%のみである。また、ラングドック-ルーシヨン州議会では、定数67名のうち、PS 26名(内女性13名)、PC 9名(内女性3名)、緑8名(内女性4名)、UMP 11名(内女性5名)、FN 8名(内女性3名)、無所属5名(内女性2名)で、女性の合計は30名で全体の44.7%を占めている。県議会と州議会での女性議員比率の極端な乖離は、前者がカントン(選挙区)選挙であるのに対して後者が名簿選挙であることによるものであろうが、ここでは踏み込まない。⁽⁶⁾

C-近隣民主主義

このテーマについては、“30の地区委員会があり、これは参加民主主義の1形態である”として、細かな点の指摘があったが、特に記すべき内容ではないので省略する。

E-コミュン共同体

E-コミュン共同体とG-デモクラシーの将来についてはシェザ市長が答えてくれた。

シェザ市長の指摘事実を示す。“都市共同体を構成するには、法的に、複数のコミュンを合わせて50,000人以上の人口をもつことが条件とされている。交通は自主財政的に運営されている。家庭ごみは20のコミュンからなる組合の任務となっている。水については、直接の運営が認められている”。こうした指摘とは別に、シェザ市長は次のように述べている。“コミュンのイデを超えてコミュン共同体のイデにたどり着くのは難しい”。その際、たとえば住民意識など、ど

(6) オード県議会およびラングドック-ルーシヨン州議会についての情報は次によっている。

http://www.cg11.fr/www/contenu/c_elus.asp

[http://www.cr-languedocroussillon.fr/1647-s-informer/1657-l-
assemblee.html/rcm/grp_libelle/4](http://www.cr-languedocroussillon.fr/1647-s-informer/1657-l-assemblee.html/rcm/grp_libelle/4)

の面で、またどのような理由でかについての説明はなかった。カルカソヌ都市共同体内では、“職業税の 90% をカルカソヌが提供している”ということである。シェザ市長は、“都市共同体が、政治色を超える組織であり、脱政治的になっている”と言うが、他方で、“政府は、共同体の議会を直接選挙によることを想定していない”ことにも言及した。シェザ市長の指摘のうち、前半は共同体の業務の脱政治化に賛成の意向を表しており、後半は共同体議会を住民に直結するとともに政治化する方向を排除し、シェザ市長がそれを支持しているようなので、一貫している。これについては議論の余地があるが、ここでは踏み込めない。

シェザ市長は“都市共同体がヨーロッパの自治政策のもとで構想されてきた経緯がある”というが、詳しくは不明である。市長はまたスペインについて、“歴史的に教区がコミューンを構成してきたが、今日は周辺の小さなコミューンを中心コミューンがまとめて、800 ほどのコミューン共同体になっている”と説明した。これについては、1999 年現在でスペインの基礎自治体ムニシピオの共同体であるムニシピオ共同体の数は 936 に達しているので、シェザ市長の記憶違いであろう。⁽⁷⁾ いずれにせよこの指摘により市長が示そうとしたことが何であるのかは不明であった。

シェザ市長は、“ドゥフェール法が地域民主主義を活気付けた”⁽⁸⁾ と評価している。他方でシェザ市長は、“社会党がジャコビニズムのもとで、権力と行政権限の集中を図っていた”と言うのである。したがって、ミッテラン＝モロア＝ドゥフェールの社会党による分権改革を、シェザ市長が結果として支持していることになるが、これ以上、ここでは踏み込めない。⁽⁹⁾

(7) スペインの地方自治については、次によっている。

<http://www.clair.or.jp/j/forum/series/html/spain/07.html>

(8) ドゥフェール氏はモロア内閣の下で内務大臣を務め、また、マルセーユの市長であった。我々の訪問の中ではロベール・ユーとジャルナックの市長が、同法について評価していた。

(9) ランスの市長へのインタビューに際して、社会党のジャコビニズムが話題

シェザ市長は、“基準どおりに水道事業を実施することに関して、行政上の諸手続きに8年を要した”と述べ、“国による統制は事後的となったが、より強制的になった”と判断している。“スペインでは、行政上の自由度が高い”とし、（フランスでは）“入札業務が市議会で承認されなければならないが、5-6ヶ月の手続き期間を必要とする”ことを例としてあげた。シェザ市長はまた、“都市共同体などの共同体は、多様な層を成しており、結果として、県（の機能）が意義を薄くし”、“フランスが民主主義のやせ細りに向かっている”と指摘している。

シェザ市長は、“田園と都市それぞれにおける議員が果たす役割の重要性”について確認した上で、“県のレベルで扱われることとなる大きなプロジェクトから、田園地区の議員が遠ざけられることになる”ことを紹介している。“構造的資金の90%のうち、30%の部分にしか地域（レジオン）は関わらず”、“県とヨーロッパからの統制を受ける地域割りと許可制という分担の中にある二重の原則”を問題にしていたが、ここでは踏み込めない。

G-デモクラシーの将来

フランスにおけるデモクラシーの将来に関して、シェザ市長は、“（市民の）公共性意識が危機に瀕しており、教育と家庭の役割が大事である”と強調する。シェザ市長は強い批判的視点を表し、“教育や家庭がもはや存在せず、若者たちは価値意識を持っていない。第三共和制のもとで創設・導入された公民教育を新たに取り入れなければならない”と主張する。

極右の台頭に関してシェザ市長は、“反市民意識が、極右の台頭を促す不満を引き起こし”ているのが原因であり、“国民の責任感覚が消失し、伝統にもとづく政党が国民性や家族や国防という、優れた

となったが、今日のフランスの政治家たちが、社会党に関してこの言葉を用いる場合、それは“集権的国家を求める頑固な共和主義的姿勢”への皮肉、批判として用いられるのが一般のようである。

価値や兵役について語らなくなっている”と指摘している。“国は至高の権力と国外政策を保持し、その他の権限を都市共同体に移譲するのが良い”というのがシェザ市長の主張である。ともあれ、シェザ市長は“カルカソンヌを愛し、自分の職務が聖職であり、それに愛情を抱いている”と告白していた。

・マルカイユー氏との会食での話題

前記のように、インタビューの後、マルカイユー助役と昼食をともし、若干の情報を得たので略記しておこう。

マルカイユー氏は、“住民が考えることは、納税通知書のことや税金がどのように使われているかということである”と断定する。“1996年にカルカソンヌで事務長に就いたとき、住民一人当たりの負債が9,800フランであったが、現在は7,200フランに減少している”とのことである。彼は、“物品購入に際してグループごとにまとめたことにより、また小さな物品に関しては地元の業者を活用することにより価格の引き下げを達成した”と紹介していた。入札を行わない買い付けに関して、“市長たちはより多くの責任を負う立場になっており”、また、“新しい会計方式(M14)により分析的会計が実効的になった”と評価していたが、ここでは踏み込めない。

II-2-⑱ モントーバン (9月9日16:30~17:55)

◎モントーバン

モントーバンはミディ・ピレネ州、タルン-エ-ガロンヌ県の主邑で、標高87メートルに広がる13,529ヘクタールの市域に54,421人の市民が居住するコミューンである。

モントーバンは、820年に聖テオダールが建設したモントリオルのベネディクト寺院の隣に、トゥールーズ公爵であったアルフォンス-ジュールダンによって、1144年に開基された。一時シモン・ド・モンフォールに占領されたが、1220年にトゥールーズのレイモン6世により奪い返され、1270年に王領に併合された。13世紀終わりに、活発な商業ブルジョワジーのおかげで繁栄し、1351年にイギリスに

譲られたが、ボーフォールのラティエが1369年にフランスに返却した。

16世紀半ば以後、モンターバンはフランスプロテスタントの主要な中心地となり、頑丈な壁を張り巡らせた。ルイ13世が1621年に町を包囲したが、奪うことは出来なかった。1635年にアンタンダン（地方長官）の、1661年には税務官の置かれる主邑となった。1628年以後モンターバンは重要なラシャ製造業の中心となり、フランス南西部の大規模な経済センターとなる18世紀に繁栄の頂点を迎えた。

1809年にナポレオンの勅令により創設された新しいタルン-エーガロンヌ県の主邑となった。19世紀および20世紀における産業上の停滞にも拘らず、モンターバンは行政や農業の大中心地であり続け、現在新産業分野で発展を見ている。⁽¹⁰⁾

◎バレージュ市長 Brigitte Barèges

バレージュ女史は、トゥールーズで1953年に生まれ、法学を学んだ後1995年以後政治に関わり、2001年の市議会議員選挙でUMPのリストの筆頭となり、市長となった。2002年にタルン-エーガロンヌ（1区）選出の国民議会議員となった。2001年以前、弁護士としての活動のほかにモンターバンの野党議員の経験を有している。⁽¹¹⁾

インタビューにはバレージュ市長、第一助役で地域民主主義担当のヴァラ女史（医師）、財務担当助役のブルバレル女史（農業）が応じた。

A-2001年選挙

バレージュ市長らによる説明を略記しよう。“3リストが選挙に臨み、内訳はPS、PC、緑、急進からなる左派連合リスト、RPR、UDF、市民団体からなる右派連合リストおよびFNのリストである。第1回

(10) モンターバンについては次によっている。

<http://www.quid.fr/communes.html?mode=detail&id=25434&req=MONTAUBAN&style=fiche>

(11) バレージュ女史の経歴については、インタビューのほか次によっている。

http://www.assemblee-nationale.fr/12/tribun/fiches_id/267561.asp

投票では FN が 12%、左派が 46%、右派が 42%であった。第 2 回投票では右派が 52%、FN が 4%、左派が 44%であった。結果として右派が 35 議席の与党となり、野党は 10 の議席を得ることになった”。また、バレージュ市長によれば、モンターバンでは“40 年間左派が与党であった”ということで、2001 年の右派の勝利はバレージュ市長らにとってだけでなく、UMP 本部にとっても意義深いことであったであろう。⁽¹²⁾

選挙では、“安全問題が大きな争点であった”ということである。“モンターバンはミディ-ピレネ州で第 2 の都市であるが、トゥールーズが近接していることと、巨大都市であることの犠牲になっている”とバレージュ市長は述べたが、具体的には説明されなかった。バレージュ市長の表現からは、モンターバンが州の中で第 2 の都市であることに誇りを持っているようであることが窺える。他方で、トゥールーズがモンターバンの自前の発展にとって一定の障害となっているのは事実なのであろう。トゥールーズの発展はパリがその周辺に対してもつ存在感のように、100 キロ四方に影響を及ぼしているのであろうが、ここでは踏み込めない。

選挙時に争点となった安全問題に戻って、バレージュ市長の説明を見てみよう。“2000 年 1 月に強盗にあった 1 人が殺される事件がおきたが、このことが、数日間続いた自動車の放火など暴力の流れを引き起こした。そこで、自分たちは、選挙プログラムの中で安全問題を大きなテーマとしたが、対立候補はそれを国家が取り組むべき課題と主張していた”、との説明があった。バレージュ市長らは、こうした犯罪がトゥールーズの近接都市であるが故の事態であるとの観察を持っているのであろうか。訪問時に、“モンターバンでは、

(12) 翌 2002 年の大統領選挙に先立つ 3 月 8 日、ジャック・シラク大統領候補は、モンターバンを訪れ、自分への支持を求めるべくバレージュ市長に賛辞を送っている。

http://www.elysee.fr/elysee/elysee.fr/francais/interventions/discours_et_declarations/2002/mars/discours_de_m_jacques_chirac_a_montauban-campagne_electorale_pour_l_election_presidentielle.3181.html

400万フランの予算を割いて市警察を3倍に強化し、軽犯罪が減少している”ということであった。

バレージュ市長は、別の関連問題として住所不定者（SDF）を話題にした。“SDFは夏に押し寄せ数を増し、町の中心部にたむろする。SDF対策費のために月に60万フランがかかる。旧東欧諸国からの移動者が増えている。SDFは市中心部で、不法住宅占拠者SQUATSとなる”。以上のごとくであった。SQUATSは、住居費はもとより電気代や水代も払わず大きな問題であるとしても、住居所有者が排除するには、警察やプレフェに訴えて対応してもらうことを含め、手間隙がかかるので後を絶たないのであろうが、ここでは踏み込めない。

バレージュ市長は他の選挙任務について、“党本部から国民議会議員選挙に立候補するよう圧力を受けた”と述べたが、圧力という言葉使いには疑問が残るところである。前記のように、バレージュ市長は2002年にタルン-エ-ガロンヌ（1区）選出の国民議会議員になっている。

B-パリテ

パリテ法に関して、“法は、政治の世界に女性が登場するという事態を習慣とさせることに役立ち、また女性をリストのトップにするのに都合のよいものであった”というのがバレージュ市長の観測であった。彼女はまた、2004年の州議会議員選挙について言及したが、その意味合いについては不明であった。州議会議員選挙でのパリテ法の適用と、それへの期待を示したかったのかもしれない。⁽¹³⁾パリテ法の適用に関してバレージュ市長は、“女性を見つけることの難しさ”、また、彼女らの“謙遜さ（引っ込み思案）”を挙げ、“外に押し出される（リストから外れる）ことによって、男性名士たちが自分

(13) 2004年のミディ-ピレネ州州議会議員選挙の結果については、次で見ることができる。

<http://www.midipyrenees.fr/fr/htm/elus/liste.asp?commission=&groupe=&departement=&nom=&Submit24=Envoyer&qbz32=>

を敗北者になったと考えている”と判定していた。

“他のレベルでの女性の立候補に関して、国民議会には女性が 10%しかおらず、政党が対応しなければならない”というのが、バレージュ市長の認識である。制度面での改善についての言及はなかった。

バレージュ市長は“上院議員の定数を削減する”という考えを提示したが、理由や展望は示されなかった。

C－近隣民主主義

モントーバンは法の対象外である。モントーバンには“7つの地区委員会があり、それぞれに助役が担当者として張り付いている。地区委員会は一人の野党議員を含む4人の議員、4人の団体代表、申込みのあった多くの候補者から選ばれた4人の代表で構成されている”とのことである。バレージュ市長は、“近隣民主主義法が一層の対話を可能とし、情報の補給をもたらすダイナミズム”を期待していた。

D－財政

バレージュ市長は市の財政について、“モントーバンが大きな負債を負っており、固定資産税があがり、投資を押さえ、財政上難しい事項について都市共同体に権限を委ねた”と説明したが、具体性に欠けるものであった。若干の説明は次のごときものであった。“経常経費が70%に達している。コミュン財政は危機に瀕している。あまり企業がなく、倒産寸前の大きな企業が3つあり、多くの商業活動はあるが、企業活動は僅かである”。このような指摘は、上のA－2001選挙で紹介した、“トゥールーズが近接していることと巨大都市であることの犠牲になっている”という話題と関連するのであろうか。⁽¹⁴⁾

(14) トゥールーズから北のモントーバンまでは 52 km、東のカステルまで 71 km、西のオークまで 76 km で、南東のカルカソンヌまでが 94 km である。トゥールーズ空港は、国内はもとよりヨーロッパ、アフリカと約 40 の路線でつながり、ニース、リヨン、マルセイユに次ぐ 4 番目の地方空港である。<http://>

Eーコムン共同体

バレージュ市長は、“コムン共同体は非常に広範であるが、うまく運営されている”と述べた。“政治的対抗勢力は州におり、3世代にわたり“La dépêche”を発行している”ということである。⁽¹⁵⁾ モントーバンの発展に関して、“ボルロー大臣⁽¹⁶⁾が特別計画を望んだが、そのためには州の支援を得なければならなかった”とバレージュ市長が述べたが、計画や、州の支援の内容、特に支援を得るに当たって、州とモントーバンとの政治的立場の違いから起こったかもしれない何らかの困難については展開されなかった。文脈からすると、何らかの困難を蒙ったはずであるが、不明である。あるいは、計画そのものが進まなかったのであろうか。

“水管理はコムン単位で行われ、共同体は組合を組織している”ということだが、不明な点が残る。“清掃事業に関して移譲の計画があり、政治的立場を超えてコムン間の協調が見られる”とのことである。

plan.toulouse.fr/

<http://www.toulouse.aeroport.fr/fr/pageEdito.asp,UIDcNode,61FD7241,UIDcRoot,18,IDPAGE,447.rwi.html>

(15) バレージュ市長の言う、州レベルの対抗勢力で“La dépêche”の発行人とは、社会党に所属し、閣僚経験があり現在州議会議長のマルタン・マルヴィ氏のことである。また、“La dépêche”はマルヴィ氏の発行する“La dépêche du midi”で発行部数は20万部とのことである。地方紙としては、ブルターニュで78万部を発行しているOuest-Franceが良く知られている。ちなみに全国紙のル・モンドは37万部で、フィガロは34万部である。マルタン・マルヴィ氏の経歴は多彩であるが、ここでは省略する。

なお、http://www.parti-socialiste.fr/regionales2004/article.php?id_article=477で同氏の経歴が見られる。また、フランスの日刊紙についての情報は、http://www.ojd.com/fr/adhchif/adhe_list.php?mode=chif&cat=1771&subcat=354などで得られる。

(16) ボルロー大臣 Jean-Louis Borloo はUMP (UDF) に所属し、筆者が2002年に訪れたヴァランシエンヌの前市長で、2002年から2004年まで、都市および都市圏再生担当大臣であった。また、2004年から2005年まで、雇用・労働・社会統合大臣、2005年からは雇用・労働・社会統合・住宅大臣を務めている。ボルロー氏に関する情報は、http://www.premier-ministre.gouv.fr/acteurs/biographie_5/jean_louis_borloo_ministre_50056.htmlなどに見られる。

コミュン共同体の活動の理解度について、“市民の側からは殆どなく”、また、田園部のコミュンの住民は、“モントーバンが都合の良いように共同体を運営していると捉えている”のではないかとバレージュ市長は判断していた。⁽¹⁷⁾

G－民主主義の将来

バレージュ市長は、“個々に違いはあるが、議員たちはシャツをぬらしている(汗でシャツが濡れるほど働いている)”と指摘した。他方で彼女は、“政治における倫理観の低下を問題とし、腐敗について”告発し、また、“公務員が財政再建を始め、諸業務に消極的である”ことを残念がっていた。さらに、公務員の士気の希薄さや業務への消極性は、“責任を回避するシステムに原因”があり、“メリットを評価するシステム”の導入に賛成の意向を示した。バレージュ市長は、“病院では、25%がずる休みをしている”ことをあげ、嘆いていた。

バレージュ市長は地方公共団体の3層制について反対の立場に立ち、県を廃止するとともに州の数も縮減するのがよいと言っていたが、具体的には示さなかった。

バレージュ市長は、“市民的公共意識が時代遅れのやり方で観察されている”と言うが、不明な表現である。また“個人主義とコルポラティブ”のどちらにも反対の意向を示し、“この点での教育の欠如”を指摘していた。

H－国際交流

モントーバンはイスラエルの都市と交流しているとのことだが、内容の説明はなかった。

(17) モントーバンが中心となっているコミュン都市共同体についてはあまり多くの情報はないが、次に見られる。

http://splaf.free.fr/liste_epci.php?depnum=82

http://www.ladepeche.com/contenu/cache/depeche_id1.asp

II-2-⑳ アルビ（9月10日16:40～20:03）

◎アルビ

アルビは、ミディ-ピレネ州タルン県の海拔169メートルに広がる4,426ヘクタールの市域に49,106人の人口を有し、タルン県の県都であり、アルビ都市共同体の中心コミューンである。

・金属器の時代

アルビとその近隣の地区では、斧を中心とする青銅器が用いられていた。続いて鉄器時代が訪れ、アルビは家族形態をもった人間の登場を見ている。

120年頃ローマ人が現れた。セラミック、宝石、ランプ、武器やエトルスキのワインの輸入は、アルビ地域でのローマの支配力を増加させることになった。ギリシアやローマの旅行者や商人が銅、タールピッチ、鉛、銀とともに訪れた。他方で、アルビの平原は小麦、大麦、亜麻、麻を産出した。ローマの支配下で過ごした民衆は同盟者もしくは臣下と見なされ、彼らの領地、生活や習慣は尊重された。

・中世

中世前期、アルビは砦を整備した。壁に守られたシテはタルン川とボンディドゥ川の間の台地を占有した。アルビは重要拠点地域として、司教の権力とトゥールーズ伯爵に仕えていた子爵の権力とに分有された。13世紀の封建体制下のフランスで、家臣たちは王権から自由になれた。アルビはかくて、南フランスのほとんどすべての都市と同様にほぼ独立していた。

アルビは、数世紀の間、文化的・知的生活により活気付いていた。宗敎生活に欠かせない書物の編集やコピーがなされ、修道会や教会の学校が知的な中心地として活動した。12世紀の初めから、このオック語を話すフランスの中で、吟遊詩人たちによって歌われた音楽詩である“大宮廷歌”が作られた。

14世紀後半に町は6つの地区に区分され、橋の街も壁で囲まれた。中世の橋のすべてがそうであったように、古橋の上には家が建てられていた。生活は多くの水場、井戸、泉の周りや、寺院の足元

にあるシテの中心部の周りで活気づいていた。

・カタリ派

“アルビ”という言葉と“カタリ派”という言葉は不可分である。これはおそらく、1145年に地域全体に見られた異端に対してサンベルナルが説教に回ったのに先立って、教皇の特使への粗末な出迎えに結びついているのであろう。カタリ異端派は主にヴォードアとボゴミールのような中央アジアから来た様々な二元論の流れを引き継いでいる。カタリ派にとっては、聖者と悪魔は人間の心を分け合っている。カタリ派の思想は、非常に寛容な文明の中にいたラングドックで足場を築いた。

イノセント 3 世の教皇就任は事態に新たな展開をもたらした。異端に対する容赦のない戦いが始まった。十字軍はシモン・ド・モンフォルを司令官としていた。略奪、強盗、刑の執行が神の栄光を再建するという名目で進められた。400 人のカタリ派がラヴォール、トゥールーズ、モンセギュールで火刑に処された。

・ルネッサンス

15 世紀の後半には安全を脅かす要因が少しずつ少なくなり、年々街に繁栄がよみがえって来た。大領主が司教の後を引き継ぎ、ロベール家はイタリア趣味を取り入れ、それがロアール渓谷に広がるようになり、またルネッサンスのフランス様式を开花させた。パステル画の文化は、アルビの人々に、町の中で優越的な役割を担っていた商業ブルジョアジーの恵をもたらす極楽の土地であった。住民の豊かさは、都市部の建物やルネッサンス様式の館に示されていた。

・プロテスタンティズム

新しいトラブルが 16 世紀に現れた。アルビは住民の中に多くの改革派を抱えていた。メディチ家のカトリーヌは、武器を携えた十字軍と同盟していたローラン・ストロッチを、南部での異端者の台頭を押しえ込むために、アルビの司教に任命した。

ルターの影響を受けたアウグスティヌス派の司祭たちは、1520 年から 1530 年以後孤立したまま、県の北部で布教にあたっていた。同

じ時期、パステルの取引が盛んになり、アルビの商人たちはヨーロッパ北部にブルーの素材を売りに出かけ、新しい宗教理論を持ち帰った。改革運動の高鳴りに直面して、カトリック側がすばやく対抗した。王国全体と同様に、カトリックの反動は、カトリックの神学や説教で教育されたメンバーから成るジェジュイット学校をアルビに開設した。

アルビはこの時期ギーズ公の側にたつリーグ派に属していたが、ギーズ公アンリ、国王アンリ三世(王党派)、プロテスタントの首領ナヴァール公アンリによる、3人のアンリの戦いが起こっていた。1568年になると、アルビのプロテスタントは80家族ほどになり、18人の商人、9人の手工業者、6人の法律家などであった。1577年以來リーグ派に占拠されたアルビはカトリックの地になった。

・革命まで

アルビの住民たちは長い戦争の間経済的停滞を経験した。地域の産業活動は多様性が乏しかった。多くのガラス工場を維持するために森のすべてを切りつくした。人はまた多くの量のかなり粗悪な麻布を織った。幾つかのなめし皮工場が町の近くに建てられ、煉瓦工場が町に色を与える資材を供給するために発展した。18世紀には、糸、ロープ、ローソクのマニュファクチュアーが建てられた。これらの努力にも拘らず、アルビはその繁栄を取り戻さなかった。

アルビは1789年の原理に忠実なまま、革命を経験した。1790年にタルン県が設立された。憲法制定会議は、郊外の状態を大きく変えていた神父たちの財産を売却した。恐怖政治は非キリスト教の実践を増強させた。聖堂が理性の寺院となったのである。

・19世紀

19世紀は革新の時期であった。県南部から来た公務員たちが総督府の勤務を命ぜられ、イギリスとドイツの技術者がタルン川のソーの製網所に働きに訪れたが、彼らはいずれも改革派教会に属していた。アルビの住人たちのプロテスタントに対する警戒心はずっと根強いものであった。

1864 年にはアルビに鉄道が通じた。列車の陸橋とともに、二番目の橋がタルンに架けられ、アルビは駅の周辺で発展した。1870 年の戦争は突然この発展の勢いにブレーキをかけた。製粉工場、製麺工場、セメント製造のための石灰工場、そしてやがてカルモーでの石炭開発など新しい産業が発展するには、20 世紀を待たねばならなかった。タルンのソーでの冶金工業の導入は、特殊な精錬所の出現をもたらした。しかし、最もよく知られた活動は、ジョレスの支援により労働協業団体として 1896 年に設立されたガラス工場である。

アルビで知られた人物としては、トゥールーズ・ロートレック、ジャン・ジョレス、ジョルジュ・ポンピドーなどがいる。⁽¹⁸⁾

◎ボンヌカレール市長 Philippe Bonnetcarère

フィリップ・ボンヌカレール市長は 1956 年に生まれ、弁護士で、UMP (RPR) に所属している。1995 年以来アルビの市長を務め、東アルビカントン選出の県議会議員、アルビ都市圏共同体の議長、中規模都市市長会事務長を兼務している。スポーツを愛好し、100 キロマラソンに出場し続けているとのことである。

インタビューには、ボンヌカレール市長の都合がつかなかったが、次の 4 氏が対応してくれた。高等教育部門助役のルイ・ゴンボー氏、地域生活部門の助役であるミシェル・フランク氏、財務担当助役のルイ・バレ氏、アルビ大学事務長のジャン・ルネ・カブロール氏である。ゴンボー氏、フランク氏、バレ氏が入替わり質問に答えたため、以下では“フランク氏らは”と記述とする。

A-2001 年選挙

選挙についてフランク氏らは次のように説明した。

“選挙には UMP、左翼、極右の 5 リストが臨み、第 1 回投票 (有権者 30,044、有効票 19,693) では FN が約 5 %、左翼諸派が 9 %、

(18) アルビについては次によっている。

<http://www.mairie-albi.fr/arthisto/histoire/hindex.html>

<http://www.quid.fr/communes.html?mode=detail&id=25513&req=Alb&style=fiche>

VEC が 9 %、社会党のマガナ氏が 28%、UMP が 49%であった。第 2 回投票（有効票 20,195）では UMP が 60%と、広範な票をかき集めた。ボンヌカレール氏の取り組みの強さと公約が支持された結果、人的結集力が増強したのが勝利の原因であった。選挙キャンペーンでは、プールや視聴覚施設の開設、健全な財政運営など前任期中のまじめな市長活動を広く宣伝した⁽¹⁹⁾ 以上である。

フランク氏らによれば、“RPR の支持層に加えて市民代表を広く取り込んだため、議員の政治的立場は多様となった”ということである。また、“左翼は前任期中の事業費の大きさを問題としたが、当てはまらない主張であった”ということである。フランク氏らは、“6 年にわたって、事業プランが予算決定に先立って示され”ていたことを強調し、とくに“予算が年内に決定される数少ないコミューンである”ことを、誇らしげに語っていた。これは意味のつかみにくい説明である。フランク氏らはまた、“コミューンが予定された補助金を協会団体に前払いで渡している”ことについても、特に自慢していた。協会などへの補助金支払いの手順などについては、他の自治体の情報がなく、彼らの自慢の意味を判定することは出来ない。またこのことのアピールが、彼らの選挙勝利に貢献したかどうかについても判断しにくいところである。

なお、タルン県のアルビが属する二つの選挙区（1、2）からの国民議会議員はどちらも社会党所属である。⁽²⁰⁾

B-パリテ

フランク氏らは、“法が強制的であり、小さなコミューンで女性を探

(19) 得票状況は説明のほか次による。VEC は不明であるが、第二回投票の得票状況から見ると、地域の右派グループと思われる。なお、1989 年には社会党が勝利していた。

http://elections.figaro.net/cgi/histo_req1?page=0&offs=0&action=M2001&re=&dep=81&Valider=Lancez+la+recherche&version=figaro

(20) <http://www.assemblee-nationale.fr/12/qui/circonscriptions/081.asp>

すのは難しい”ことだと告白していた。また、別の問題として、“能力のある男性をリストからはずすこと”が起こることを挙げ、“ともあれ法は（政治的）行動や意識を前に進めることになる”と判定していた。アルビの助役たちのパリテに関する指摘や判定がボンヌカレール氏のものと同一であるかは別としても、市長を含めたコミューン執行部の中に少なからぬ男性中心主義が見透かされる。前日モントーバンで、バレージュ市長はじめ三人の女性執行部と会見してきた筆者には、好対照の印象であった。

フランク氏らによれば、“社会党は女性を含む協会団体の支持を得ていたが、自分たちは不十分であった”ということである。また、“前任期では女性が自分の担当分野を望んだが、今回は幾人かの女性は意欲が劣っている”とも指摘していた。ここからも、アルビでの男性中心主義が窺える。かれらは、“女性が町を制圧している”と表明したが、慨嘆の意味か尊敬の意味かについては判断できなかった。しかし、別の選挙任務について、“法によりパリテを定めるべきではない”と述べていることから、フランク氏らが女性の進出に否定的な姿勢を示しているとするのが妥当であろう。

C-近隣民主主義

フランク氏らは、“前任任期開始の1年後の1996年に、地区会議について構想した”と述べ、“地区会議には担当の助役がつき、その議長は住民の選挙により選ばれる”とつけ加えたが、選挙の具体的方法などは説明されなかった。また、“月に1度規則的に、地区の集会に住民が呼ばれる”とのことであり、“1997年には、毎週水曜日2-3の地区を通り、情報を集めたり、小さな日常的な要望へのサービスを提供したりするために、事務室のあるミニバスを配備した”と紹介していた。現在、“バスの運行について地区と相談している”とのことである。

フランク氏らは、“以前は6地区の集まりがあっただけだが、現在は18の地区協会があり、様々な催しを行っており”、“意見交換の場として、13箇所地区の家を18ヶ月以内に建設する計画を持って

いる”と説明した⁽²¹⁾。具体的な活動として、“地区の議長が中心となって、例えば安全についてなどのように、特定のテーマについて議論しあう朝食会が運営されている”という事である。また、“催し物を行なう場合、計画に応じて活動（経常）予算が割り当てられ、地区事務所が貸しだされる”との説明があった。

近隣民主主義法についての感想として、フランク氏らは“選挙民は毎日主張を持っており、整理し、活用するのには手間が掛かる”と強調していた。“集められた情報により、計画の変更が起こることもあり、寺院の近くに予定していた駐車場を市場の地下に移した”例を挙げていた。

D－財政

フランク氏らは、“アルビが財政上の大きな問題を抱えておらず、フランスの自治体の中で20-25位の健全自治体の中に位置づけられる”と誇っていた。現在は“過去の借り入れの整理をしているが、1住民あたり1,000ユーロだ”ということである。フランス全体で、財政が健全な優良コミューンについての資料がなく、また、1住民あたりの借入金額の少ないコミューンの資料もないことから、上のコメントについての正確な評価は出来ない。

“公共市場法典は以前は窮屈なものであったが、柔軟性をもたらすことになるだろう”と歓迎している。フランク氏らはまた、“小規模な業者に仕事を与えるために、契約を分割している”ことを独自の事例として紹介した。これだけでは公共市場法典の弾力化に応じたアルビの工夫の説明としては内容をつかみにくい。敢えて事例を公共建築物として推定すれば、その建設を幾つかの分担契約にすることであろうか。土地調査、設計、基礎工事、外壁工事、間仕切り工事、屋根工事などに分割して請け負わせることである。この場合、統括請負者がいなくなることによる、連携や責任の欠如が起こらな

(21) 地区の家 maison de quartier については次に詳細が見られる。

<http://www.mairie-albi.fr/vivre/maisonsdequartiers.htm>

いのであろうか。設計や施工監督を別途設定し、役所が全体の監督を行うと言うことであらうか。

M 14 に関して、フランク氏らは“企業会計に近づくことにより、会計方式として誰もが理解しやすいものとなった”と説明したが、疑問が沸くところである。M 14 会計方式は会計専門家でないと簡単には読み取れないものである、とアンジェの会計責任者が説明していたからである。ともあれここでは踏み込めない。

E ー 共同体

“共同体 (アルビ都市共同体 La communauté d'agglomération d'Albigeois: C2A) は 2002 年 12 月に創設され、17 のコミューンからなり、総人口 7 万 7 千人を有している”が、その設立に当たっては、“政治的立場の違いや、構成コミューンの 3 分の 2 の賛成を得なければならぬ”ことから、困難があったということであるが、詳しい説明はなかった。また都市共同体の構成要件等についてはここでは立ち入れない。“共同体の執行部を構成するのは 20 人で、4 人がアルビの代表、また 40 人の議員のうち 15 人がアルビの代表だ”ということである。

フランク氏らはコミューン共同体の主な事業が、“ゴミ処理、清掃、交通、スポーツだ”というが、共同体のホームページによれば、産業ゾーン、川港、空港、住宅、地域整備、社会活動などが事業範囲とされている。フランク氏らは都市共同体に関して、“責任の移行と政治的作用”に関わる問題が起こり、“大いに議論が交わされたが、投票では合意が得られ、対立には至らなかった”ことを取り上げた。さらに説明がなされなかったので、ここでは踏み込めない。⁽²²⁾

個別の問題として、フランク氏らは“2 つのゴミ処理組合があったため、統合するにあたって合理的な解決策を探さなければならなかった”こと、“様々なコミューンにとって企業に対する事業税を均衡化するために 5 年の調整期間を設けている (企業を圧迫しないよう

(22) アルビコミューン共同体の URL は、<http://www.grand-albigeois.fr/>である。

にする)”こと、“公共交通機関が住民の移動の50%をまかなっているが、営業収入が総支出の11%にしかない”こと、“タルン川の土手くずれや家のシロアリ発生への対策が求められている”ことをあげていた。事業税の均衡化についてはイメージがつかみにくく、また上の個別問題が、共同体にとってどの程度の財政負担となるのか、県や州あるいはコミューンがどのような役割を担っているのかについては示されなかったが、共同体が地域の要請にこたえる組織であることは頷けるところである。⁽²³⁾

F－安全・生活の質

フランク氏らは、アルビが“中規模の都市として、人間的な規模のおかげで注目を受けている”と表明する。生活の質が高いということを書きたいのであろうか。アルビには、“4つの大規模なリセ、私立のリセが3つ、職業教育リセおよび大学がひとつ”あることが紹介された。アルビでの中・高等教育については、Hの補足でも簡単に触れる。

安全に関してアルビには、“この問題について意見の出来る役所を超えた委員会があり、コミューン内通行を時速30キロにすることや、集団通行の実施、自転車道の設置について検討している”とのことである。また、“10月から、コミューン警察が国家警察と連携して学校に参与し、各学校に1人の警察官が対応することになっている”とのことであった。具体的にどのレベルの学校のことであるのかは不明である。安全確保の観点からすれば小学校もしくは中学校であろうが、校内での暴力等の対策というのであれば、中学か高校であろう。若者の小さな非行が少ないコミューンであることから見て前者であろうか。それにしても治安への警戒がここまで進行しているこ

(23) この部分は、インタビューのほか次によっている。

<http://www.mairie-albi.fr/vivre/albimagjanv.html>

http://www.tarn.pref.gouv.fr/pages/elus_communes_et_intercommunalite/groupement.asp?id=248100737

とは危惧すべきことであろう。本号執筆時点で、筆者が訪問したクリシーヌーボアでの騒動が引き金となりフランス全土が騒乱状態になったが、ここでは立ちいれない。⁽²⁴⁾

民主主義にも関連するが、市民意識の欠如について、かれらは、“犬の糞”について指摘し、軽犯罪については“国内でベスト 10 にはいるほど発生の少ないのコミューンである”と表明していたが、裏が取れていないのでここでは踏み込めない。中心部で“犬の糞”が少なかったという印象は受けたが、一般住宅街では不明である。

フランク氏らは“旅行者特にノマドに対して、相当額の資金を当てている”と指摘したが、これが国の政策に基づくものであるのか、独自に進めているのかについては不明である。かりに国の政策であるとすれば、ノマド（チガヌ）の移動経路や移動時期、規模などが定まっていなければ、各コミューンの対応は難しいことであろう。なぜフランク氏らがこれを話題にしたのかを含めて、ベッソン法と関係する対策であろうが、ここで踏み込むことはできない。⁽²⁵⁾

G - 民主主義の将来

フランスの民主主義の将来に関して、フランク氏らは“市民の政治意識の低さ”を問題とし、他方で、“行政上のデスポティズム”に言及した。後半については、フランク氏らの言葉としては疑念が起ころころである。コミューン議員、特に首長が中央の行政官に諸々の批判や対抗意識を持っていることは頷き得ることであるが、“行政上のデスポティズム”との表現には不明な点がある。フランク氏

(24) 2005 年 10 月 27 日からフランスの各都市郊外で起きた暴動は、11 月 8 日の緊急事態宣言（夜間外出禁止令）の発効、2006 年 1 月 3 日同令の解除まで、フランスのみならず海外でも大きな関心を呼んだ。日本のマスコミでもとりあげられ『現代思想』34-3 号では特集が組まれた。なお、CPE をめぐる現在の争点も、同じ根に基づくものであろう。

http://www.ambafrance-jp.org/article.php?id_article=1048

(25) ノマドへの対応法は、<http://www.legifrance.gouv.fr/texteconsolide/MEEAX.htm>に見られる。また、ベッソン、ド・ロビアン、ボルローの一連の住宅関連法については、さしあたり次が参考となる。<http://www.robien.fr/>

らは、中央行政の中に、彼らのプロジェクトや先進的な試みに対してブレーキをかけたり、法や規則を盾にとどめたりする傾向があると受け取っているのであろうか。議員と行政官との権力闘争の問題になるであろうが、ここでは踏み込めない。いずれにしても、フランスのコミュン、特に大規模コミュンにおける首長の自治体行政官に対する優位性を考えると、上の“行政上のディスポティズム”という表現は、国家行政に関して用いられていることであろう。

フランク氏らは、“ガストン・ドフェールの主導で始められた分権改革が1983年以来20年たっているが、ジャコビニズムがなお生きており、また、公務員がなお力強い状態にある”と指摘した。上の“行政上のディスポティズム”の観察と同じ視点であろう。2003年に分権化の更なる改革がなされたが、この点についての評価は特になかった。⁽²⁶⁾

FNの台頭に関して、フランク氏らは、それが、“ルペンの下に集まった多様な不満分子”の増加によるものであると主張したが、その理由等については展開されなかった。なおルペンはブルターニュ出身であるが、協力者のミチエル氏の、ブルトン語を話す母イヴォンヌによれば、ブルトン語でルペンは首領の意味を持つということである。フランク氏らは、“人々が安全に対する恐れを抱き、ルペンがアラブ人たちを〈非安全〉と同定させ、政府がルペンに大通を用意した”が、“デマゴギーは民主主義の死である”と主張した。この種の判断は、ルーアンやアンジェでの会見、また、ロベール・ユーとの会見でも聞かされたことである。なおロベール・ユーは、扇動家自身よりも扇動される側のことを問題としていた。扇動が成り立つのは、当然送り手と受け手の存在を前提とする。扇動への対抗策は、情報を受け取る側が事態を疑問視し得る批判的考察能力の育成しかないであろうが、扇動が起こるのはそのような能力の欠如や、

(26) 2003年3月28日の自治体財政の強化、地域民主主義の拡大に関する諸改革については、2005年から始まり、2008年までに実施される。

それを超えた歴史的・社会的事象の出現を背景とするのであるから、困難な課題であろう。とりあえず、ルペンの活動範囲を増強し、フランス国民によるルペン受け入れを促進する背景として、フランスの移民問題、ヨーロッパ統合によるアイデンティティの変化、ヨーロッパ経済の低迷、ヨーロッパ各国での右派の台頭、アメリカでの 9.11 テロなどが考えられるであろう。ここではこれ以上は踏み込めない。

H-補足

アルビ大学事務長のジャン・ルネ・カブロール氏がアルビ大学の現状を紹介した。ジョスパン政府の“大学 2000 年計画”をうけて、大都市大学からの分離を図るべく、アルビ大学はトゥールーズ大学から、ニーム大学がモンペリエ大学から、ヴァランス大学がグルノーブル大学からの分離を果たした。アルビ大学はトゥールーズ大学の 1 学部として生まれ、2002 年 4 月にアルビ大学となったが完全な独立ではなく、学位はトゥールーズ大学から授与されるとのことである。現在 2,000 人の学生が修学し、看護、鉱物資源などの学部がある。アルビ大学としては、トゥールーズ大学から完全な独立を得るために、外国大学との提携を模索したい意向があるとのことであり、その提携先には日本も入るとのことであったが、具体的には踏み込まなかった。なお、東京のカトリック系大学から 20-30 人の学生が留学生としてくる予定だというのが、どの大学かは不明である。

カブロール氏は、学生 1,000 人に対して 130 人の直接雇用が生まれるとして、大学設置の経済効果についても説明していた。

II-2-⑳ ヴィシー (9月12日 16:30~17:10)

◎ヴィシー

ヴィシーはオーヴェルニュ州 (州都クレルモンフェラン) アリエ県 (県都ムーラン) の海拔 263 メートルに、585 ヘクタールの市域と 26,915 人の住民を有する県内 2 番目のコミューンである。古代からローマ人が往来し、彼らは大規模な“温泉水”の導水工事を成し遂

げた。この水道は大侵略の際、大きな破壊を受けた。10世紀にブルボン朝の宮廷貴族たちの館が建てられ、14世紀に町は補強された。ルイ2世がヴィシーに城を建てさせ、天使修道院を創設した。ヴィシーは16世紀に繁栄し、水の知名度は17世紀に向上した。また19世紀には農民団体が形成された。第二次世界大戦にヴィシーはペタン政府の本拠地となった。

この十年の間、ヴィシーはパートナーとともに、美容、健康、余暇のためのセンター造りに取り組み、4年間で20億フランの投資を行って来た。2001年にはヴィシー都市共同体が23のコミューンの参加を得て形成され、ヴィシー大学・技術拠点が整備された。後述のように、ドイツ、スコットランドなどの6都市と交流している。⁽²⁷⁾

◎マリユレ市長 Claude Malhuret

マリユレ氏は1950年生まれで、パリ第五大学で医学を勉強した（医学博士）後、1973年以後、フランス健康組合、国際保健機構で働き、1978年には、1971年にフランス赤十字などからのヴォランティアが中心となり創設された「国境なき医師団」の初代議長となった。1986年にシラク首相の下で人権担当大臣に就任した。1989年から1993年までヨーロッパ議会議員、1993年から1997年まで国民議会議員、1989年以来現在までヴィシーの市長を勤めている。また、ヴィシー都市共同体副議長、オーヴェルニュ州議会議員を兼務している。⁽²⁸⁾

(27) ヴィシーについては、次によっている。

<http://www.quid.fr/communes.html?mode=detail&id=3492&req=vichy&style=fiche>

<http://www.ville-vichy.fr/fr/points/index.html>

また、ペタン政府（ヴィシー政権）については、ヴェルコールの『海の沈黙・星の歩み』（岩波文庫）や、ロバート・O・パクストンの『ヴィシー時代のフランス。対独協力と国民革命 1940-1944』（柏書房）などの翻訳、川上勉著『ヴィシー政府と「国民革命」』（藤原書店）などがある。隣のリムーザン州のOradour-sur-Glaneで起こされた、ナチスによる虐殺については、<http://oradoursurglane.free.fr/>、<http://tex69.club.fr/Oradour/oradour.htm>が参考となる。

(28) マリユレ市長については、次によっている。

<http://www.ville-vichy.fr/fr/mairie/index.html>

<http://www.msf.fr/site/site.nsf/pages/70>

面接に応じたのは、経済発展、雇用、交通、環境担当の第一助役のマカン氏である。

A－選挙

2001年選挙は、マリユレ氏にとって三回目の選挙であった。選挙には右派の2リストと左派、FNの各1リストが臨んだ。右派はマリユレ氏のリストとマルセーユ出身の弁護士アラン・コラル氏の率いるリストで、左派はMRG、緑、PSからなるジェラルド・シャラス氏のリストであった。コラル氏は自分の弁護した訴訟がメディアに取り上げられたことで名を知られ、シャラス氏は代議士で知名度があった。第一回投票の結果は、マリユレ氏39%、シャラス氏28%、コラル氏19%、FN12%で、第二回投票には前3者が臨み、マリユレ氏が54%を得票して勝利した。

選挙に当たっては、“ヴィシーのイメージを革新すること、ホテル街を整備すること、観光を発展させること、町の魅力を増強させることを目指して、都市計画の一環として、1989年以来歩行者専用道や駐車場の整備”などを行ってきたことを、主張したということである。彼らはまた、“大学分権化の流れを受けて、生物技術と語学に関する高等教育機関を発展させたこと”を訴えたということである。さらに、“スポーツ団体、特にバスケットボールやラグビーのチームの来訪が町を活性化させ、ヴィシーが組織したボートレース世界大会に多くの観客を招いた”こと、また、“商業の発展がこれからの課題であること”を訴えたということである。

B－パリテ

マカン氏は“法には戸惑ったが、よい方法である”と評価していた。適用に際しては、“まず男性にこれまでの協力を感謝し、リストから外れることへの了解を得て、次に女性を探さねばならなかった”ということである。女性議員は“文書類に丁寧に目を通したり、男性より現実的な対応を考えたりする”利点が認められるとのことであるが、後者についての具体的な指摘はなかった。マカン氏らは“コミューンでのパリテの実施が、15年ほどのうちに代議士選挙にも影響

を及ぼすであろう”と期待していた。

C－近隣民主主義

“ヴィシーには以前から13の地区会議があり、執行部と議長を選んでおり、地区代表が副議長となり、ひとりのコミューン議会議員が各地区の担当として当てられている”とのことである。“地区会議は、彼らの活動に関して補助を受け、住民は会費を納入している”ということであるが、活動内容や、補助金、会費について具体的には示されなかった。地区の企画・事業に関しては、“事前に特別会議が開かれ、多数意見が採用される”とのことである。マカン氏は、“地区会議が意見交換の場 *des relais d'opinion* であり、有用なものである”と強調していた。

地区会議の意義に関して、ここで、政治倫理を問題としよう。地区会議の中では、どこから住民操作が始まり、どこから住民の情報収集と意思反映が始まるのであろうか。自分の候補者を勝利させるために、意見交換の場を活用し、集票活動もなしうる。しかし議員は全ての者の代表であり、民主的な平等の実現に努めるよう求められている。もはや戦いの中にはおらず、任務についている。ここに単一任期とすることの意義がある。これにより、次の選挙に勝利しようということと、役割を遂行しようとすることの2重の努力から免れることが出来る。多数派になっているのだから対抗勢力や住民を操作する必要はない。この種の操作から離れないなら、人はすでに次の選挙活動に入り込んでいるのである。デマゴギーを駆使することによって、議員としての役割を公平に遂行しない事態が起こるのではないであろうか。審級、性格の異なる機関での議員の活動に際して見られるデマゴギー的・政治的側面と民主的・行政的側面との緊張関係に関する問題は興味深いテーマであるが、ここでは踏み込めない。

D－財政

マカン氏は、ヴィシーでは財政上の問題はなく、“基本を実現することが課題で、質の継続性を願い、よく説明し、情報を提供しなけ

ればならない”と説明した。かれらは会議宮殿 *le palais des congrès* に 1,217 席のオペラ劇場を建造し、全体で 500 ヘクタールのスポーツ公園を維持しているとのことである。かれらは、“一般経常費補助の増加がますます望めなくなり、経常経費に優先順位を付け、管理しなければならない”ことを強調していた。“住民一人当たりの負債は、1 万 5 千フラン”だということである。マカン氏は、財政の扱いはますます責任が重くなっていると述べていた。また、“住民はみな国からの補助を期待し、議員たちは責任の重さを感じていない”と嘆いていた。

E－共同体

ヴィシー都市共同体 *La Communauté d'Agglomération de Vichy Val d'Allier* は 23 のコミューンで構成され、78,000 人の人口を有している。マカン氏によれば、共同体の運営にあたり、“コミューン規模の差異、政治的立場の差異により困難が起きている”ということだが、現在の議長が共産党所属であること以外の説明はなかった。他の情報によれば、議長はキュセの市長のルネ・バルデ氏である。

マカン氏は、“以前は公務員がコミューンの仕事と共同体の仕事を分有していたが、現在は共同体専任の公務員が配置されており”、都市共同体が“公務員の数を増した”と説明した。共同体とは別に、交通組合が残っているとのことであった。また、“共同体の権限とコミューンの権限の区分が少しずつはっきりしてきた”ということであった。⁽²⁹⁾

F－安全・生活の質

マカン氏は安全・環境に関して次のように指摘した。“7-8 年以来外来者 *des marginaux* が来るようになり、コミューン警察が排除に取り組んでいる”。“さまざまなロマンティックな建築物を保存することで、町の景観を保持しようとしている”。“観光の町として 800 軒

(29) ヴィシー都市共同体については、インタビューのほか次によっている。
<http://www.vichy-economie.com/Synthese.htm>

ほどの商店のうち40%が日曜日にも営業している”。

G－民主主義の将来

マカン氏は、民主主義が“現在満足すべき状態になっている”との観測を述べた。具体的な展開はなされなかったが、“満足すべき状態”というのは、改革への耐えざる意思を持つべきという視点から見て、助役とはいえ、政治家の言葉としては疑問の残る観測と思える。マリユレ市長への強い信頼感と、彼らのコミューン運営の自負を示すものであろうか。極右の台頭に関してマカン氏は、“フランス北部で見られるような健全な市民意識が融解し、南部に見られる精神傾向に向かっている”と評した。フランスの北部と南部との間にこのような2元的精神傾向があるとは考えがたい。たしかに、歴史的に自治都市（コミューン都市）の伝統を有する北部と、現在極右の支持者の多い南部との間には少なからぬ差異が見られるであろう。しかし、意味が限定されていないため、“健全な市民意識”という“基準”で区別するのは不明瞭である。南部の人間が温暖の中に住み無頓着であるのに対して、北部の人間はより厳しい自然の中で物事をより慎重に捉えるのであろうか。ただ、南部に移民が多いであろうことや、たとえば中世のコンシュラ都市やプレヴォ都市の伝統など別の要素も考えられるであろうから、これ以上は踏み込めない。⁽³⁰⁾

マカン氏はまた、“責任意識が高まるので、アメリカのような2大政党制”を願っていると述べた。“政党の分散が責任意識の醸成にとって抑制的となり、またデマゴギーを生みやすい”というのである。“右派の台頭は憂慮すべき”で、反対に、“緑の台頭を喜ぶべきであり”、“緑の成長は政治意識の向上をもたらし、デモクラシーの発展の力となる”と評価したが、もうひとつ具体性にかけるものであった。

“行政の複雑化が公務員の役割をますます大きくしているが、議員

(30) 移民の歴史、関連法、実態などに関しては次に見られる。

<http://www.vie-publique.fr/politiques-publiques/politique-immigration/index/>

たちが町の運営、民主主義の発展の中心であることを願っている”と期待していた。マカン氏は、“ジスカール・DESTAN が優良な役人に囲まれていたが、公務員のリクルートに難しさがある”と指摘していた。何か具体的な対策があるのかについては、展開されなかった。

H－国際協力

かれらは、ドイツ、スペイン、スコットランド、ルーマニアの諸都市と交流しているが、費用のかかる姉妹都市ではなく、文化、商業、産業活動での交流をしているとのことである。⁽³¹⁾

I－州の権限

マカン氏は、“州の財政運営がうまく機能しておらず、この点での議員たちの教育・研鑽がなされること”を望んでいたが、教育・研鑽の具体的な対策は示されなかった。さらに、“隣り合う州との競合がおこり、発展にとって好ましくない状況にある”と嘆いていたが、市場競争を歓迎する DL の評価としては奇異の感を受ける。教育については、“ジスカール・DESTAN が、よい成績を残している私立高等学校の設置に尽力したことを評価し、より多くの自由”を求めている。これは偏った見方かもしれないが、国全体の統計が不明であるので踏み込めない。他方で、私立学校では規律が厳しく、また、私立のグランドゼコールは国立大学よりも教育、特に職業教育が行き届いているとも言われている。⁽³²⁾

II－2－② パリ 16 区 (9 月 15 日 11:12～12:45)

◎パリ 16 区

ガロ-ロマンの時期、パリはセーヌ河岸に暮らしていた漁師、農民、

(31) ヴィシーのパートナー都市については次に情報がある。

<http://www.ville-vichy.fr/fr/points/index.html>

(32) フランスの私立学校については以下に情報がある。

<http://www.enseignement-prive.info/nouvelrech.html>

http://www.quid.fr/2006/42_31.htm?emph=écoles,Ã©coles,privÃ©es,privée,Ã©cole,écoles,privÃ©e,privées,école,ecole&query=ecole+privée

<http://www.liberation.fr/page.php?Article=322684>

船乗りたちの小さな村であった。この集落の周りに森や農地が広がっていた。1109年にオートゥーユのジェノヴェファンの修道士たちが、この林間に教会を建てた。

1260年にサンルイ王がセーヌ右岸に広がる平地を妹のイザベルに与え、彼女がそこに三番目の宗教センターであるロンシャン修道院を建設した。王の狩猟地であったルヴレの森に通じる西ルートで3つの重要な村が出現した。パシー、オートゥーユ、シャイヨである。

パリはあまり都会化されていない街のあらゆる不便さを抱えていた。首都に出入りするための快適な道がなかったため、旅人や商人は川の道を利用していた。

シャイヨはパリの中心から2キロメートルにあるフォーブールである。シャイヨの教区は、シャン・マルタン・デ・シャン修道院に属していた。シャイヨの名の起源は、その土地の自然を示す *caillou* (砂利) から来ている。シャイヨはなによりも農業生産にたずさわる集落であった。1621年、カステューユ婦人が領地をバソンピエール侯爵に売った。総督の後継者たちは、つづいてその領地を、大家族の若い娘たちのために寄宿女学校を建てようとしたイギリス王チャールズ1世の未亡人アンリエットに譲った。1702年にルイ14世はシャイヨを、コンフェランス・フォーブールの名の下にパリの城郭外市街（フォーブール）とした。シャイヨはパリと簡単な柵で仕切られ、この時期の人口は2,000人であった。首都は入市税が徴収される3.3メートルの柵（壁）で囲まれていた。これらの柵は市民に嫌われ、1789年7月12日から13日の夜に破壊の対象となったことを説明するのである。

パシーの村はもとはオートゥーユに所属し、高台のドレセ大通から始まり、パシー通りに降りている。大通がブルーローニュの森につながっている。1747年以来、その領地はブルーランヴィリエ城となり、その著名な主プープリニエールは20年の間、画家、彫刻家、旅の途中の外国の大貴族を迎え入れた。彼の死後、城はパンティエーヴル

侯爵に貸与された。パシーの一部をなしていたパシーの草原には、19 世紀になってもなお風車が立っていた。重要な人物たちがパシーでの日々を刻んでいる。ベンジャミン・フランクリンは難しい任務を果たしている間、パシーで非常に幸せな生活を送った。彼はショーモン氏が彼に貸した家に住んだ。リシュリュウ枢機脚は、王宮に遺贈した温室を管理していた小さな土地を所有していた。ルイ 15 世は温室を修繕させ、コックの城を整備した。

早い時期から、オートゥーユは静寂を望むパリ市民たちにとって理想的な滞在場所となった。多くの住居が建てられ、ボアロー、モリエールは町に名声をもたらした。ラシーヌ、ラフォンテーヌ、ミニヤール、リュリー、ラブリエイエルがモリエールの家に頻繁に訪れ、ムートン・ブランの料亭で食事を楽しんだ。18 世紀に、エルヴェシウス婦人のサロンは、パリが優れた知識人と認めた者のすべてを向かえた。ディドロ、ダランベール、コンディヤック、ドルバック、モルレ、シェニエ、シャンフォール、マルゼルブ、テュルゴなどである。啓蒙の世紀が到来した。ひとはきらめくような夜会の中で、より自由で、より寛容な精神を前進させた。

村の発展において水が役割を果たしていた時期に、泉もまたオートゥーユとパシーの名声に貢献した。1650 年以來、パシーで澄んだ水の泉が発見された。医学校がその水に治療の効果を見出した。ルラゴア修道院長がその所有者となり、開発しその名声を高めるのに貢献した。キシュラの泉は 1925 年になるまで利用されていた。しかしその産業上の使命はデルセール家族により確定された。この家族は継続的にこの地を獲得し、セーヌの河岸につらなり、レイヌアール通りまで上るすべての土地の所有者となった。

革命は保守的な性格の新しいコミュンでは流血をもたらさなかった。しかし、珍しい聖域や豪華な建物が消失した。聖母訪問会やミニモ会の修道院、以前から見られた城である。バガテルだけが偶然に災難を免れた。何人かの貴族の犠牲者が民衆の虐殺ではなく、合法的な執行の対象となった。本当の革命が始まった。広大な不動産

が、一握りのアッシニヤ紙幣で売られ、1世紀以上にわたり繰り返られる有利な不動産取引の前兆となった。

バンジャマン・デルセールは、パシーにベトラーフの砂糖製造所と綿の製糸工場を建てた。1847年の彼の死後、不幸にもこの大きな領地は分け与えられてしまった。皇帝ナポレオンはシャイヨーに芸術、科学、大学、文書館の宮殿に囲まれた、ローマの王宮の建設を願った。ペルシエとフォンテーヌによって建てられた計画は広大であったが、帝国の凋落がこの実現を中断させた。ナポレオン3世の下で首都の様相が変貌していくことになる。オスマンはパリが爆発するのを理解した。彼はこの小さな村々を活用し、パリに組み込むことを望んだ。ブーローニュの森が、アルファンによるコンセプトに従いはじめに整備された。ナポレオン三世はまた、エトワールの交叉点を終点とし、凱旋門から発する街路の数を12とすることに決める事になる。

村々のコミューン議会の同意の下に合併が進行した。大領地の伝統は消失したが、個人の館、私的なヴィラ、通路が残り、保護された空間の中で生活がなされている。ヴィラモルティエ、ヴィラモザール、ヴィラボアローなどである。新しい道路が切り開かれ全体に建設が進む中で、新しい建築が進むのを目の当たりにする。新芸術の創始者エクトール・ギマール、ペレ兄弟、マレ・ステヴァン、そしてルコルビュシエである。サンラザールから来る鉄道がオートゥーユまで続くことになった。⁽³³⁾

◎テタンジェ市長 Pierre Christian Taittinger

テタンジェ氏は1926年パリで生まれ、事業(醸造業)を営み、1968年から1995年まで上院議員を務め、上院副議長、大臣に就いたことがある。1953年に市議会議員となり、1965年に再選され、1977年以

(33) パリ16区については次によっている。

http://www.mairie16.paris.fr/mairie16/jsp/Portail.jsp?id_page=47

<http://www.quid.fr/communes.html?mode=detail&id=36526&req=Par&style=fiche>

来パリ市議会議員に選ばれ、1989 年以来パリ 16 区の市長を務めている。UMP に属している。面接に応じたのはテタンジェ市長自身である。市長応接室にはかれの胸像が飾ってあった。質問は、テタンジェ市長の話の展開上予定の流れにはならなかった。⁽³⁴⁾

B－パリテ

テタンジェ市長は、“パリテとは別の道があった”と述べたが、女性を男性同様政治の責任者とするための具体的な方法は示されなかった。彼の下では、“長い間コミュン議会に女性議員がいた”ということであるが、内容は不明である。市長は、“政治家が女性を登用する習慣がないのは、英国の男性世界の伝統である”と述べたが、意味がつかみにくい。彼はまた、“女性が、政治に関わることは時間の無駄だという印象を持っているようだ”と述べた。いずれにしても、“法は人々の政治意識を発展させるであろう”という感想を述べ、ミシェル・セールの、“われわれが今いる生活に取り組むことを知ろう”という言葉引用したが、その書名は示されなかった。テタンジェ市長の発言からは、全体として、パリテに批判的であることが窺われるが、引用により、若干の慨嘆を交えてパリテ法を受け入れようということであろうか。

C－近隣民主主義

テタンジェ市長は、“地区会議を構成するために、区の委員会により選ばれたヴォランティアを登用し、少しの不安があった”と述べたが、不安の内容は不明である。彼はまた、“義務的な投票に反対で”、“政治階級は善行を行うことを望んでいるという印象を与え、自立的存在である”とも述べた。ここから伺えるのは、テタンジェ市長の豊かな経験に基づく政治家としての自負心であろうか。彼は、“反党派（政党）の問題は、イデオロギーに支配された政治を持つ代わりに、回答を探さないことだ”と考えている、ということであった。

(34) テタンジェ市長については次によっている。

http://www.senat.fr/senfic/taittinger_pierre_christian59560u.html

やはり保守政治家としての責任感と自負心の現れであろうか。テタンジェ市長からは、近隣民主主義に対する積極的評価は示されなかった。

D－財政

財政上の問題として、テタンジェ市長は、“(財政負担) 割合が不均等であり、16区が最も多く収めている”ことをあげた。財政構造上パリがどのような仕組みになっているのか不明であるが、4税のうち市に上納する部分についてのことであろうか。市長は、“社会党が、生産性が滞っているのに、支出を増やさなければならないと訴えている”と批判していた。社会党の政策に対する批判であるとともに、特にドラノエパリ市長への批判をも含んでいるのであろう。市長はまた、“料理する人たちへの教育のフォローアップ”を挙げ、また、昔は“メッセージの配達人がいて、続いてパリが樋の中を通す気送速達郵便の連絡網を持っていたが、(現在は)16区の市役所からパリの市役所までメッセージを送るのに1分もかからない”と指摘したが、前半についても後半についても財政の観点から意味がつかめないものである。

E－上院の意義について

テタンジェ市長が上院副議長を勤めた経緯から、上院の役割について尋ねた。

テタンジェ市長は、“昔は選挙任務の兼任が可能であったが、現在は出来ない”と述べ、続いて“進歩が上からやってきた”と加えていたことからすると、上院も含めた兼任の制限に賛同しているのであろうか。そのうえで、“上院の役割は法(の制定)にとって、重要であり、国民議会の活動を思慮深く、また法文に従って検討”している、と評価していた。“二院制であることにより、(法案の)不成立の可能性のある二つの機関を持つことにより、国民議会議員が修正意見により悩まされる”ことがわかれると指摘した。他方でテタンジェ市長は、“上院ではなく、メディアによる圧力の下にある”とも加えた。

F－安全・生活の質

安全は、“市民の権利であり”、テタンジェ市長は、“質の良い権利”を求めてきたと言い、特に“道端で生活している子供が問題である”ということを手挙げたが、これは 16 区以外の地区についての言及であろう。たとえば、パリ 16 区近くの郊外にあり、社会党系の知識人が多く住んでいる富裕なコミューンであるガルシュに訪問した際に問題となっていたのは、コミューン内の路上の穴ぼこであるなどということであった。“道端で生活している子供”についての指摘は、パリ 16 区についてではなく、市内の一部地域や郊外の貧困コミューンについてなされたのであろうが、ここでは大きな問題すぎるので踏み込めない。ただ、テタンジェ市長の発言には、“道端で生活している子供”をどう保護するのかではなく、どう排除するのかという発想が見られるように思えることを記しておく。

テタンジェ市長は、市内に“800 ヘクタールの森がある”ことを、誇らしげに紹介していた。テタンジェ市長はまた、“えんどう豆遊びをした子供の頃の記憶”について紹介したが、筆者には不明の事柄である。さらに、“競争したものに 1 エキュを与える”遊びについても言及していたが、内容は不明である。これらによって、市長が訴えたかったのは、失われたフランス人のふるさとなのであろうか。この誠実かつ保守的な訴えについては、ここでは言及できない。いずれにしても、テタンジェ市長が、生活の質や安全について古典的な事例と発想の再生を願っていることだけは伺えたことである。

G－民主主義の将来について

テタンジェ市長はいきなり、“フランスでは 35% がデモクラシーを信じておらず、50% が選挙リストに登録しないか、投票に出向かない”と嘆いた。35% についても 50% についても、どのレベルを問題としているのかの特定なしに指摘されたので、裏の取りようがない。35% については、民主主義への不信感というテタンジェ市長の（主観的）判断の部分もあるのであろうから、フランス人における民主主義の成熟度の問題として、豊かな経験を持つ保守政治家の

慨嘆であろうかと推測するほかはない。また 50%については、もしそれが実態であるのなら、民主主義を実効的なものにすべく、各政府レベルにおいて、登録や投票行為の促進のための対策が必要であろうし、選挙制度の問題にも連なるものであるのかもしれないが、ここでは踏み込めない。⁽³⁵⁾

テタンジェ市長は、“政治階級は現在を生きているが、不満を引き受けることはない。法文は作られるが、何もなされない”と言う。この発言は、政治家であるテタンジェ市長自身の言葉として、勇気のある自戒の言葉であるのかもしれない。テタンジェ市長は電子投票を問題とした。彼がこれに言及するのは、氏が推定する、「35%の選挙不信者」、「50%の非投票者」への対応を考えてのことであろう。しかし、選挙不信者や投票率の向上に関しては、便利さなど技術上の改善によってだけで解決するものではなかろう。実際テタンジェ市長は、“地域の選良により改革が始められなければならないし、公務員の生産性をどのように向上させるのかが問題である”と言うのである。この点についての具体的展開はなかったが、ひとつ提案していたのは、“シャンパーニュでのぶどう狩りの労働”であった。このことは市民の選挙への関心の向上や、公務員の資質・生産性の向上に関わるものではないので、こと挙げた真意は不明である。テタンジェ氏がシャンパーニュの有名な蔵元の関係者であるために、そこでの季節労働の組織に絡めて言及したのかもしれないが、不明である。

テタンジェ市長はまたフランスの地方システムについて、“選択す

(35) 2002年におけるフランスの人口は61,530,000人で、大統領選挙(第1回投票)では登録有権者41,194,689人、投票者は11,698,956人で、投票率71.6%であった。また、同じ年の国民議会議員選挙(第1回投票)での投票率は64.4%であった。

http://www.insee.fr/fr/ffc/chifcle_fiche.asp?ref_id=NATTEF02133&tab_id=23

<http://www.conseil-constitutionnel.fr/dossier/presidentielles/2002/documents/tour1/bilan.htm>

ること、そして県を廃止することを強いられており、州はヨーロッパと結びついており、また、州の分割の基礎は調整されうるであろう”と紹介した。もともと県は 1790 年の憲法会議によって創設されたものである。これは、革命による王権ならびに封建的紐帯に代えて、近代的な中央権力の浸透と行政の運営のために、それまでの王領や貴族の領地の枠組みにとらわれずなされたものである。

続いて、テタンジェ市長は、“フランスの政治階級が、最も保守的”であると嘆いていたが、内容は示されなかった。フランス人が一般に異議申し立てや、反抗や革命的行動になじむ国民であることは歴史が示しているが、政治家や官僚が具体的な課題に対して進歩的であるのか否かについて、ここで断じる事は出来ない。今日になってみれば、単純に保守的とか進歩的もしくは革新的というように腑分けすることが難しい、もしくは意味を成さない状況になっているというべきであろうか。

テタンジェ市長はさらに、“政治家と市民との間に大きな断裂が存在しており”、“民主主義を進展させるためには、これまでの教育と異なる方法が必要である”と指摘した。これに関連して、“極端なものを作り出す別の要素がある”と言い、極右を論じるとともに極左についても論じるべきだと付け加えた。前半部分と後半部分とは別の問題であると同時に、関連する問題にも思われる。前半は、政治における本質的課題であり、後半は国家権力獲得と維持に関する技術的課題である。別の問題であるというのは、まさに“本質的”と“技術的”の違いである。“本質的”な課題に関しては、政治家、国家権力者、政治権力者が市民にとってどのような存在であるのか、あるべきなのか、また、市民が政治家、国家権力者、政治権力者にとってどのような存在であるのか、あるべきなのかという問題であり、現にある権力(者)がこれらについて“本質的”にどのように考え、市民が“本質的”にどのように考えるのかという問題であるのに対して、“技術的”課題というのは、国家権力の獲得、維持に関して、支持者をどのように集めるのかという問題であるからである。

関連する問題だというのは、政治における本質的課題の解決は、政治における技術的課題の解決の中で進められなければならないということに基づいているからである。テタンジェ市長がどのような視点で上のことを述べたのかについて推測は出来ないが、政治に関する、二つの課題に関して、政治家として意識に上らせていたであろうことは、次の彼の説明からも推測できる。テタンジェ市長は、“ジョスパンを第二回投票から排除するために、共和国連合が極右に投票した” というのである。まさにこれは、共和国連合の政策と社会党の政策の戦いの中で、「安全」「移民への警戒」をスローガンとするFNを浮き立たせて、第五共和制憲法下で、社会党を歴史上初めて第3党に貶め、別の刀で、RPRが政権に就いたタクティクスなのかもしれない。傍証としてあげるが、協力者のファヴロー氏の共和国連合に所属する友人によれば、“1981年の大統領選挙において、RPRはジスカル・デスタンを失墜させるために、ミッテランに投票した” というのである。これは、RPR側が、ミッテランがこの時点ですでに癌に侵され、ヴァル・ド・グラースの病院で治療を受け、仮に大統領になったとしても2年はその座に付き得ないだろうとの判断、期待を持っていたためであろうということである。ともあれ、ミッテランは2期14年政権の座に就くことになり、分権改革をはじめ様々な事業を断行したのである。そしシラクの2期目の選挙に当たり、テタンジェ市長が述べたように、今度は社会党を倒すために、RPRがFNを利用するという策略が取られたという事であろうか。これはまさに、権力もしくは政治家と市民との関係の問題であるよりも、狭義の権力闘争の問題であろうが、ここでは踏み込めない。

民主主義の将来に関して、テタンジェ市長はメディアを問題とした。“政治階級はトンネルの中にあり、政治家とメディアの関係を注目しなければならないが、メディアが政治の仕掛けを歪めている” と指摘した。彼はまた、“プレスが自分の誤りを認めなければならない” とした1881年法をとりあげ、“実際は、政治家がプレスに対抗

しても、彼の主張は紙面からはずされる”と訴え、プレスが“破壊に向かうひとつの権力であり、国家権力は本質的に限定されたものとなっている”と主張した。テタンジェ市長と筆者は判断を異にするが、氏の指摘は事実の一端を伝えるものであろう。

いずれにせよ、テタンジェ市長の言説は刺激的な内容であった。

H－国際関係

テタンジェ市長は、“コミューン内に市電を建設することが問題となっているが、そのための財政資源は国際的な基盤に依存している”として、コミューンレベルでの主要事業についても、ヨーロッパの規模でなされていることを指摘していた。

他方でテタンジェ市長は、“人々の間で互いに知り合う”ことの重要性をあげ、“これが精神の開放をもたらす”ことになると指摘していた。

II－2－②③ ベーグル (9月15日15:05～16:03)

ベーグルは、アキテーヌ州、ジロンド県にあるボルドーの郊外市で、海拔8メートルの1,080ヘクタールの土地に、22,672人の人口を抱えている。

・前史

ベーグルの名の起源は、くちばしを意味するケルト語の *Bécula* という語にさかのぼる。この語は合流地点アンベの、くちばしのイメージを持つ突端で終わっている土地全体を表している。1966年にベーグルで、(紀元前約15万年頃の)旧石器時代に属す火打石製の石器が発見された。

・ガロ-ロマン期のベーグル

サンピエール教会の前で20世紀初頭に発見されたモザイクの破片は、この土地がガロ-ロマンにより占領されたと考えさせるものである。これらの破片は、ヴェルネメティの古い寺院から出土している。1850年に発見され、同様にアキテーヌ博物館に保存されているガロ-ロマン期の碑文は、この時期と推定し得る領地もしくは墓地の

存在を確定している。

・ 6 世紀：ベキュラの聖ペテロ教会

ボルドーの聖十字修道院のベネディクト修道士たちは、異教徒の寺院の廃墟にベキュラの聖ペテロ教会を建立した。漁師たちの守護聖人であるサンピエールに捧げられた教会は、革命まで巡礼の地となった。現在の教会は、サンモールの聖遺骨をそこに安置したベネディクト修道士により 18 世紀に再建された。

・ 11 世紀から 15 世紀：願望の土地ボルドー

11 世紀を通じてブドウ畑が少しずつ原始の森に取って代わり、ボルドーの都市新興市民が気品のある住宅を建てさせた。続いて、イギリスとフランスの支配の下で、アキテーヌは長い間ボルドーによる地域の占有と所有権をめぐる激しい戦いの舞台となった。1295 年の憲章により、フィリップ美男王がベーグルをボルドーの支配域に併合した。この時期、〈サンピエールの信徒会〉のメンバーが、教会の周りで生活が営まれていたコミュンの経済的発展の任を帯びていた。14 世紀には、11 世紀に建設されたベーグルのモット城が、リュイノルマンにあるフランク族の貴族であるセギュール家により再建された。

・ 16 世紀と 17 世紀：ベーグルでの説教

1598 年、アンリ 4 世は、カトリックとプロテスタントの間の宗教戦争を終結させる「ナントの勅令」を公布した。しかし、ボルドーのカトリックは、彼らが“自称改革者”と名づけていたこの宗教活動を拒んでいる。ベーグルはプロテスタントとボルドー市長のオルナノ元帥により、新教信仰の場となることを求められた。プロテスタントの寺院が 1605 年に建てられ、ルイ 14 世により、ナントの勅令の廃止のあと 1685 年に取り壊された。

18 世紀：共和国の司祭館

17 世紀から 18 世紀にかけて、国民公会に籍を置く富裕な家族がベーグルでエレガントな田舎家を建てた。1790 年、教区の司祭であったマルク・ダギュザンが、日曜日のミサで、満場一致でベーグ

ルの市長に選ばれ、市民の会議の投票により承認された。長年の間、サンピエール教会が市役所であった。前面には共和国の銘である、“自由、平等、友愛”が掲げられていた。革命の初期に、ベーグルは平穏と相互尊重の中で生きるという意志を確認していた。

19 世紀：ベーグルの独自性の最初の要素

19 世紀は、ベーグルの独自性をあらわす最初の三つの事業により特徴付けられる。真鱈の乾燥場の設置、複線の鉄道の敷設、大通りを利用してのコミユンの北部の切断である。

1820 年に町は三つの“村”および“九つの集落”からなり、535 の家屋に 2,050 人が暮らしていた。ほぼ完全に農業の中心地であるベーグルは豊富な果物や野菜を、また、非常に重要な良質のワインを生産していた。真鱈と並んで、ラディッシュはベーグルの特産品とされ、19 世紀におけるコミユンの主要な資源のひとつであった。

1864 年に、ベーグルの土地 76 ヘクタールを削って、大通りの建設がなされた。他方で、鉄道の到来と 1855 年に建設されたサンジャン駅への近接が、町の産業的・経済的発展に刺激を与えた。19 世紀末、ベーグルで大工場が誕生し、産業ゾーンが鉄道に沿って形成された。

20 世紀：ベーグルの偉大さと衰退、ボルドー郊外の第一の産業地

ベーグルはボルドー郊外の第一の産業地となり、1931 年に最も人口が増えた。ベーグルで急速で無秩序な都市化が進んだ。美しい公園やブドウ畑、産業施設や労働者の住宅地が交じり合っていた。三つの港が町の発展に関わった。(現在ルクレール街路と呼ばれている) 道によって城街に結ばれた大港、小港ならびにサン・モリス港である。

このころ、ベーグルの社会党所属市長であったアレクシス・カペルは、“住民に最小限の身体上の衛生を提供し”、子供に水泳を教えるためにプール建設の計画を採択した。この施設の実現は、建築家のブランシャールに託され、隆盛であったアール・デコ様式により建築された。

先の大戦のあと衰退が始まった。産業は甚大な被害を受けた。ボ

ルドーの“赤の郊外”であるベージュルは、住民の大部分がコミューンの外で働き、就寝のために帰ってくる町であった。8,872人の就労人口中5,866人がコミューン外で働いていた。社会的・集合的施設の建設の遅れが町に魅力をもたさず、産業家を背けさせた。

1989年：新しい跳躍

1989年の市議会議員選挙で、ノエル・マメールに率いられた新しいリストが勝利した。彼の推進の下で町は大きく躍動し、そのイメージを急速に変化させ、経済活動を促進することになった。ベージュルは、地域の永続的発展政策にもとづく連帯的で自発的な町の計画に取り組むことになった。まず、都市と環境の再評価を通じて、町の形態の大掛かりな転換が図られた。ベージュルの発展は「環境と生活の質の憲章」と「町の契約」に立って、一貫した手段に基づいている。多数のグループや組織が家族を迎え入れ、生活の質を改善し、余暇活動を活発にするために作られている。地区に纏まりを持たせ、居住区を多様化させるための「意欲的なプログラム」が実現されている。ベージュルはそのアイデンティティに忠実で、70年代に作られたバイパスにより分断されていたガロンヌとつながりをつけ、港と川の活動の発展に連動させて、観光上、商業上の整備に取り組んでいる。また、伝統と結びついて、二つの大きな年間の文化事業を通じてガロンヌを祝うことにしている。ガロンヌでの花火と真鱈祭りである。⁽³⁶⁾

◎ノエル・マメール市長 Noël Mamère,

マメール氏は、1989年に、緑の党からの最初の市長としてベージュルの市長となり、現在2期目である。同氏は、1948年12月25日にジロンドのリブールヌで生まれ、ジャーナリストとして緑の党の活動に加わり、1997年にジロンド3区の選挙区から国民議会議員に選

(36) ベージュルについては次によっている。

<http://www.mairie-begles.fr/hist/hist2.htm>

<http://www.quid.fr/communes.html?mode=detail&id=1483&req=begles&style=fiche>

ばれ、現在 2 期目である。また、アキテーヌ州議会議員、ヨーロッパ議会議員も歴任している。マメール氏はまた、2002 年の大統領選挙に立候補している。緑の党の具体的活動などについてここで立ち入ることは出来ない。⁽³⁷⁾

インタビューは、マメール市長の都合により国民議会の控え室で行われた。2001 年選挙については触れず、緑の政治哲学について若干の説明を受けた。

A - “緑” の政治哲学

“緑は、グローバルに思考し、地域で活動する”、という理念にたって活動しているとのことであった。マメール市長は、“森の伐採が地球の変動を引き起こしているが、私たちにはひとつの世界しかなく、また温室効果が起こっているが、このことは中心的な気がかりである”、と訴えた。マメール市長はまた、“自治は集権と対立し、諸制度が自治に向かうべきである”として、コルシカを例に挙げた。また、『島の姿』“*Figures d'îles*”という本を引き合いに出し、コルシカと日本の類縁性を挙げたが、見当はずれであろう。他方で、“ヨーロッパの連邦”に賛成であるというが、具体的な説明はなかった。

マメール市長は、緑の活動に関わる二人の人物を挙げ、彼らの活動や著書に大きな影響を受けたことを伝えた。一人はルネ・デュモンで、“農業と発展に関する研究と著作の発表をしたフランス人の農学者”である。もう一人は、ジャック・エリュルで、『テクニクあるいは世紀の仕掛け』の著者である。マメール市長は、二人について、また彼らの活動や思想をどのように具体的に引き継ぎ、活動しているのかについて、詳しくは説明しなかった。⁽³⁸⁾

ベールグでの 2001 年選挙について、インタビューでは触れられな

(37) マメール市長については次によっている。

<http://cr.middlebury.edu/public/french/Lexique/Elections/fr.news.yahoo.com/presidentielle/bio/mamere.html>

(38) ジャック・エリュルについては、www.ellul.org/bio_f_m.htm に略歴がある。

かったので、結果だけ見ておこう。第2回投票で、マメール氏のリストが49%、左派のパリ氏が36%、右派のブリュ氏が13%であった。⁽³⁹⁾

B－パリテ

1 パリテ法に関して、はじめにマメール市長は、“ベールグでの自分のリストでは、候補者の52%が女性であった”と伝えた。⁽⁴⁰⁾ マメール市長によれば、“法がパリテを命じているが” “政治の現場と同様、社会においても、女性は厳しい現実の中にいる”ということであった。また、“緑の党がひとつの要請をしており、もともと、様々な政党の連携があった”と加えたが、何に関するどのような要請で、どの党と組んだのかは不明であった。パリテに関する法の制定に関わって、女性の会議や社会党との連携を行ったということであろうか。

2 リストに女性を加えることに関して、“何の問題もなかった”ということである。

3 女性の政治への取り組みに関わって、マメール市長は、“彼女たちが、努力を惜しまず、誠実で、注意深く、細かく、粘り強い”と大いに評価していた。

4 パリテ法のほかの選挙での適用に関しては、“比例代表制の導入が妥当である”ということであった。

C－近隣民主主義

近隣民主主義については、4のベールグでの実態についてだけ聞いた。なお、ベールグは近隣民主主義法の適用対象コミューンではない。

(39) 選挙については次によっている。<http://2001.scrutins.net/dna/newsM2001/>

(40) ベールグのホームページ (<http://www.mairie-begles.fr/pratiq/pratiqd.shtm>)によれば、マメール氏の与党と思われる市長を含めた議員28人のうちでは、男性が15人、女性が13人であるから、マメール市長の説明とは食い違いが、ここでは踏み込まない。

ベールでは、インタビュー後の“9月25日に、憲章にもとづき4つの住民会議を設け、会議の代表は議員ではなく、メンバーは、三つの団体(協会、18歳以下の若者、外国人)から抽選で選ばれる”とのことである。また、“全体で1万ユーロの財政支援が行われる”ということである。

D-財政

財政については、1、2、5について、簡単に説明があった。

マメール市長によれば、“財政が大変逼迫し、経常経費が60%を占め、注意深く運営しなければならない”とのことである。財政逼迫の直接の原因であるとの前置きなしに、マメール市長は、“コミュン共同体が大規模な予算を持ち、路面電車に費用がかかり、清掃や道路整備を行わなければならない、いずれにせよ抑制的とならざるを得ない”と述懐する。またマメール市長は、“ジュペが、少数派であったが、多数派を作ろうと試み、投票なしの一致がなされた”と述べたが、具体的には不明であった。“コミュン共同体や都市共同体が、民主的に選任された議員を長とすべきだが、現行では、取引の成り立つシステムになっている”と批判していた。さらに、市民から見た“財政の透明性の欠如”を指摘していた。

E-共同体(4-6)

マメール市長は、“都市の拡張”を問題とし、“経済的に恵まれていない者が中心街から押しのけられ、これが、地域の未整備の公式を生み出し、農業地が分譲地を作るために最高の価格で売られている”ことを指摘した。“ヴォアネ女史が、農村コミュンが、彼らのサービスを管理・提供するために、グループ化するための法案を提出した”ことが紹介されたが、その内容と意味は不明である。マメール市長は、“副次的な鉄道路線が廃棄され、輸送の80%がトラックによってなされている”と指摘し、“罰則によるのではなく、経営による保護を望み、別の形態の輸送、エネルギー利用を望み、ビジネス的農業や土地に依存しない(農業生産)飼育”を批判した。

F－安全・生活の質

マメール市長は、“生活の質が改善されている”とした上で、“ベールグでは1960年代にアルジェリアの労働者を受け入れるために、緊急居住区を建設した”という紹介があったが、関係の理解しにくい説明であった。ベールグでは、“家族ごとにアンケートを行い、労働者用の庭（家庭菜園を作る人のために、仕切られ、グループになった小規模の土地）が用意されている”とのことである。マメール市長は生活の質の向上を示すものとして、“4つの託児所、自転車道、緑地帯の増加、ガロンヌの土手”について紹介した。他のコミューンとの比較をしなければならないであろうが、ここでは省略する。なお、47ページにあるベールグについての1989年以後の記述も参考となる。

マメール市長は、“政府の無謀さ”に触れ、“公共秩序の維持に関して”、それが“国の王権に由来し、市長たちが長官になっている”と揶揄した。

G－民主主義の将来

マメール市長は、“市長が民主主義の中で本質的な役割を負っており、近くにある歯車であり、彼らは模範となり、誰にも意見表明を認め、尊敬する心を奨励しなければならず、社会的苦痛を受けている者たちが表現出来るようにしなければならない”と主張する。“高級官僚が任務の兼任を事実上決定している”とマメール市長は指摘したが、不明な指摘である。推測すれば、兼任している議員が時間を持てないため、行政の決定を官僚が主導することになる事を示しているのであろうか。一方で兼任批判であり、他方で官僚制批判であろうが、市長自身現在国民議会議員とベールグ市長を兼任している。

マメール市長は地方政府の階層が多いことを批判し、まず、県を廃止し、基礎自治体と州の2層制にするとともに、その際州の数を減らすことも提案しているが、3層制の欠陥や州を統合することのメリットについて、さらにはコミューン数の多いことについては触れ

なかった。なお、ボルドー都市圏共同体の予算が州のそれを上回っていることを指摘していたが、このことが州を統合するべきだという主張の根拠であろうか。いずれにしてもここでは踏み込めない。

マメール市長はメディアの役割について、メディアの中に、“民主主義の連鎖となるような討論が存在せず、テレビの幻惑が存在するだけである”と批判する。新聞発行部数・テレビ受信数はともかくとして、日本のテレビや特に新聞に比べ、政治的傾向性の強いフランスに関してのマメール市長の評価は、自身がメディアで働き、新しい緑の活動に加わっている観点からなされたものであろう。⁽⁴¹⁾

ルペン (極右) の台頭に関して、マメール市長は、“それが、共和主義的政党の不十分さにより引き起こされている”と判断し、“国家がその国家的諸機能 (教育、健康、治安、職業推進) を果たし、保証人”にならなければならないと主張する。これだけでは、マメール市長の主張の真意を測りにくいですが、字義通りに取れば、特に鮮明かつ独自の認識とはいえないであろう。

マメール市長は、“上院を廃止するか、別の選挙方式に変えたり、議員任期を国民議会議員と同じにしたりするなどの改革を行うことが必要であり”、“上院が、右派の多数派となって障害物となっている”、と批判した。

前記のように、マメール市長は、連合的ヨーロッパに賛成であるが、“今日のヨーロッパはそれを強く望んでおらず、永続的な発展よりも自由主義に対応する傾向にある”と指摘した。

H - 国際協調

“フランスはアフリカとの交流をしているが、これは新植民地主義によるものである”とマメール市長は断定する。交流という、地域の切り取りにより、“第三世界に負債を負っている”というのが、マ

(41) 注(14)で示したように、フランスの日刊紙についての情報は、次のホームページなどで得られる。

http://www.ojd.com/fr/adhchif/adhe_list.php?mode=chif&cat=1771&subcat=354

メール市長の認識であるが、ここでは踏み込めない。また、マメール市長は、“農業における薬物投入”について話し、脈絡上、第三世界の農業生産への化学肥料による汚染などについて説明したかったのかもしれないが、不明である。

II-2-②④ カンペール（9月16日13:00～13:55）

カンペールはブルターニュ州フィニステール県の主邑で、海拔6メートルの8,266ヘクタールの土地に67,127人の人口を有している。

カンペールは歴史的にはローマ時代から知られ、その後、5世紀から18世紀にかけてカンペール・コタンタンと呼ばれ、オデットの丘となった。カンペール（ブルトン語で合流を意味するが、オデ川、ステール川、ジェ川の合流する場所であることにもとづいている）はローマの街道の交差点であった。コルヌアーユの王コランタンが、有名なグラドロンによって創設されたと伝えられる町の最初の司教であった。11世紀に侯爵領となった王領は、ブルターニュ公に統合された。市壁に囲まれ、町は13世紀に有力になったが、ブルターニュ侯爵の継承戦争がその発展を妨げた。16世紀にカンペールはブルターニュの4つの主要都市（教区）のひとつになった。宗教戦争の間、カンペールはリーグに属し、フォントネルにより2度包囲され、オーモン将軍に抵抗できなかった。フランス革命に際して町の範囲は寺院の教区内に狭められたが、町は拡張を望んだ。

1789年にコミューン改革があったが、市長は1781年以来のジャンドルが続けた。1793年にはデアンに続いて、ユルトゥラ・モンタニャールにより、カロック・ケリリスが市長に任命された。恐怖政治がカンペールを襲い、1794年に、フィニステール県の33人の行政官のうち26人がギロティン刑に処せられた。同年、県議会がカンペールからランデルノーに移転された。1976年にフィニステール中央学校が開設された。1799年にカンペールがふくろう党員（王党派）の襲撃を受け、司教のオードランが暗殺された。

1806 年に市の最初の屠殺場が開設された。ゲルニザックホテルが
コミュン庁舎になった。1821 年に人口が 9,400 人になった。1829 年
に新市庁舎と裁判所の建設が始まった。32 年から 34 年にかけて、さ
らに 49 年にコレラがカンペールに蔓延し、時には 1 日 5-6 人が死
亡した。1837 年にカンペール銀行が創設された。1839 年には子供の
避難所が開設され、また最初のプロテスタント寺院が創設された。
48 年の革命によりジョセフ・ル・アルが市長になったが、ジャン・
マリー・ラルールに代えられた。52 年に家に番号が付され、道や広
場の名が登録された。53 年、モールス信号機が導入された。61 年に
最初の水路が完成した。62 年に中心部でガス灯が敷設され、鉄道が
開通した。68 年にカンペール商業港の治安規則が発布された。1870
年、サンクロンタン寺院が聖堂になった。この年から、共和派の市
長ジョセフ・アストールが 1896 年まで市長となった。70 年から 71
年の戦争で 21 人の住民が死亡した。1878 年、コミュンの学校が世俗
の立場をとることになった。1881 年にコミュン学校が国立リセと
なった。商工会議所が開設された。1885 年にコレラが伝播した (94
年が最後)。

1901 年にカンペールの人口が 19,441 人となった。1904 年に女子
のための中等学校が開設され、後のリセ・ブリズーとなる。1905 年、
労働者センター、陶工、絵描きなどの労働組合が結成された。1906
年、カンペールで革命的なストライキが起こった。神学校生徒の追
放が 1907 年に起こった。1912 年に初めて社会党市長アンリ・ジャク
ランが選ばれた。1915 年にカンペールが国防公債に 44,000 フラン
を出資した。142 人のカンペールからの兵士が戦死した。14 年から
18 年の間のカンペールでの戦死者は 556 人となった。1919 年にカン
ペールが犠牲コミュンを記憶するために、戦争により全面的に破壊
されたアルデンヌにある小コミュンのジュニヴィルの代理母になっ
た。1925 年にオルン岬の住民が彼らをロクマリアにつなげる通路の
建設を請願した。1914-1918 年の間の戦争犠牲者の記念碑が建立さ
れた。1935 年にカンペールが洪水に襲われた。1936 年、人民戦線が

結成された。1938年、多くのスペインからの避難民がカンペールに到着した。1939年にフランス北部と東部の避難民1200人がカンペールに到着した。1940年6月11日と12日にカンペールがフランスの首都となった。6月19日カンペールがドイツ軍により占領された。フランス・レジスタンスがロンドンと交信していた唯一の連絡網であるジョニーが設置された。初期からのレジスタンス闘士、エリック・ティクシエが1941年9月20日に処刑された。1944年8月8日、レジスタンスによりカンペールが開放された。1945年、3人の女性市議会議員が普通選挙により選ばれたドゴール将軍がカンペールを公式に訪問した。人口は20,149人となっていた。1950年にComité d'Etudes et de liaisons des intérêts bretons Celib⁽⁴²⁾が創設された。1953年に、善意と支援事務所の後を受けて、社会支援事務所が開設された。1956年多種目スポーツセンターが開設された。1960年にペナール、ケルフンタン、エルゲアルメルとカンペールが、九つの教区を含む“大カンペール”を構成するために合併した。

1961年にマックス・ヤコブ橋が建設され、市役所が拡張された。1962年に人口が50,670人となった。市立図書館が完成した。1964年に競馬場地区に産業地区の敷設を開始した。1965年にコミューン広報誌が発刊された。1967年、ZAC（市街化規制地域）が開始された。家庭ごみ処理工場が建設された。1968年5月、カンペールで20,000人がデモに参加した（5月革命）。1969年ケルモアザンでZUP（市街化優先地域）の作業が開始された。1971年にIUT（工業技術短大）が開設され、ドイツのレムシャイトと姉妹都市提携を行った。1973年、3番目のZUPでの学校グループが建設された。1974年、プールギナン橋が建設された。洪水に襲われた。プティ・ゲランの産業ゾーンが敷設された。1975年にPOS（土地占有計画）が開始された。1978

(42) Comité d'Etudes et de liaisons des intérêts bretons Celib については多くの記事があるが、同委員会の100年の活動に関する記事が次に見られる。

<http://www.lexpress.fr/info/region/dossier/rennes/dossier.asp?id=433546>

年、カンペール作家協会（後のブルトン作家協会）が創設された。1979 年音楽学校が市立になった。1980 年、レネック病院が開設され、新しい POS が承認された。1982 年にラジオ・フランスの西ブルターニュ支局が開設された。1983 年の市議会議員選挙でエコロジストのリストがはじめて登場した。ポーランド人と連帯する組合の名 (Solidarnosc) を道路につけた。農民の激しい示威行動が起こった。1984 年にラジオ・フランスの西ブルターニュ支局への襲撃が起こった。1990 年に人口が 59,421 人になった。1995 年にカンペールが深刻な洪水を蒙った。1997 年にプロネ、プリュギュファン、プロムランが共同体に加わった。1999 年、洪水対策工事が始まった。2000 年 12 月、カンペール中心街が浸水をうけた。2001 年にアラン・ジェラル氏が市長になった。⁽⁴³⁾

◎アラン・ジェラル市長 Alain Gérard

アラン・ジェラル市長は 1937 年生まれで、1986 年から上院議員を勤め、2001 年にカンペールの市長に選ばれた。UMP に所属している。農業、教育経験があるとのことであった。

インタビューは上院の 1 室で行われた。また、時間の関係上、選挙に関する質問は省いた。⁽⁴⁴⁾

B-パリテ

ジェラル市長は、“考え方として妥当な主張であり、最小の弊害しか伴わない主張であると言えるが、法の制定には反対した” のことである。反対した理由は、“その制限により、女性が多数派にな

(43) カンペールについては次によっている。

http://www.mairie-quimper.fr/67627979/0/fiche_pagelibre/

<http://www.quid.fr/communes.html?mode=detail&id=8586&req=q&style=fiche>

(44) 選挙について簡単に触れておく。第一回投票では、ジェラル氏のリストが 44.9%、社会党のジョセフ氏が 35.1%、地域主義・緑・左派連合 9.8%、極右 5.4%、MNR 4.8%であった。ジェラル氏と連合と合流したジョセフ氏が 2 回目投票に臨み、ジェラル氏が 52.13%を得て勝利した。

<http://votants.free.fr/Municipales2001/29-quimper.htm>

れないからだ”ということあげた。また、“いつか、男性が、政治に携わろうとする男女の関係が逆転するようなとき、男性が保護されることに満足することになろう”と言うのである。興味深い着目であるが、一方は言い逃れのように見えるし、一方は穿ちすぎであるのではないか。女性が多数派になれないというのは、パリテ法によって排除されていないし、パリテ法の立法趣旨は、何よりも女性が排除されてきた歴史を、制度的・根本的に是正するということであるからである。

ジェラルール市長は、パリテ法に従って、“男性と同数の女性を見つけ出すのが難しく、自由時間のある女性をリストに載せる結果となってしまったが、登用したかった女性が仕事に追われていた”、と残念そうに述べていた。彼はまた、“社会的、政治的、地理的均衡を図らねばならなかった”と説明した。ここで、“社会的、政治的、地理的均衡”というのは、票の獲得の面からも、コミュン行政の運営の面からも配慮されるべき事項であるが、これに女性登用の課題が加わったことにより、さらに難しさが増したということであろう。また、“近隣民主主義法”の適用の観点から、特に“地理的均衡”についての配慮が働いたことであろう。

ジェラルール市長は、“女性が、新しく物事を始めるのに積極的であるというメリットを持ち”、“感性に富み、男性と異なる視点を提示する”と評価する。他方で、“男性が、女性たちを受け入れ、彼女たちに仕事を任せるために、努力しなければならない”と述懐している。

C-近隣民主主義

ジェラルール市長は、“議員が地区で起こっている諸問題や、それを伝達させることに意を注ぐべきである”と主張する。

ジェラルール市長は近隣民主主義に関して、簡単なペーパーを用意してくれていたので、紹介する。

1996年にカンペールは、ケルフンタン、ペナール、エルゲ-アルメルの河岸の住民の諸協会を統合して地区会議を発足させた。

2002 年 2 月 27 日に採択された近隣民主主義法は、人口 8 万人以上のコミューンでの地区会議の設置を義務付けている。法によれば、この措置は、人口 20,000 人から 79,999 人のコミューンでは任意とされている。

カンペールの人口は最新の調査では 63,238 人である。カンペール当局は近隣民主主義法の意味での地区会議の設置を行わないこととした。

実は、カンペールは地域民主主義に関して、法的規制を超えることを望んでいる。このテーマに関する考察が多くの優先的課題を掘り起こした。

- ・住民を交えた近隣民主主義を優遇すること
- ・住民に対する公聴、対応を改善すること
- ・コミューン活動の透明性を確保すること
- ・代表を介さずにコミューン議員の参加を刺激すること

この意志は諸協会ならびに河岸の住民との出会いを組織づけることに現れている。

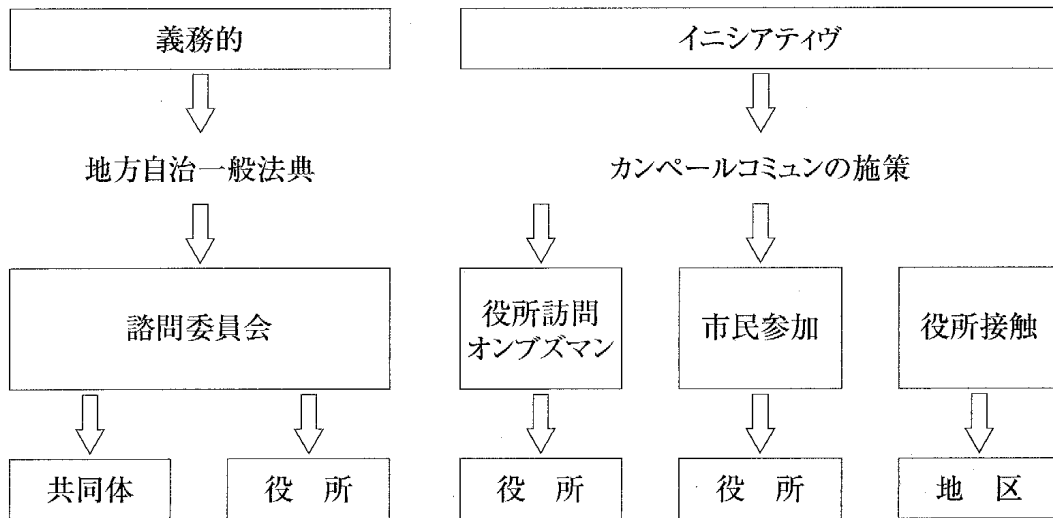
ほかに、多くの活動が、地区における〈市役所との接触〉もしくはさまざまな〈イニシアティヴ〉および〈市民参加〉である。

法的義務：諮問委員会

地方自治一般法典の L.1413-1 条に規定された近隣民主主義法は、地域の公共サービスについての諮問委員会の設置を定めている。カンペールのコミューン議会は 2002 年 7 月 5 日と 11 月 15 日の審議により、水と屠殺場のための監督委員会を設置した。公共サービスの運営における十分な透明性を得るために、コミューン当局は当局により運営されるサービスの全体にその権限を拡張することを願った。

同じタイプの委員会が共同体の交通、清掃、ごみ処理に関する業務についても設置された。

カンペールの地域民主主義



カンペールのイニシアティブ

1. 役所接触（地域体制）

これらの活動は一時的（限定的）なものである。それは、協会ならびに河岸住民との恒常的な接触をする地区の助役により遂行される現場での活動を補完している。

—〈住民協会との接触〉

予算の決定前に住民協会の願望を収集するために市役所の中で、地区ごとに9月から10月に集会を組織する。

—〈住民接触〉

地区ごとに9月から10月に集会を組織する。これは地区全体について住民の願望を収集することを目的とする。毎年、集会は地区内の前年とは異なる場所で行われる。

—〈訪問接触〉

これは、地区内を巡回して住民と会合するスタッフの訪問を実施することである。

—〈新居住者接触〉

定期的に役所が新居住者を迎える日を組織する。このイニシアティブは、〈役所接触〉方式の要素のひとつである。

カンペールの各住民が迎え入れの朝来訪したときに、自分の居住区域について案内され、この会合に当たって地区の助役との接触と意見交換を容易にする結果をもたらす。

—〈カンペールの色〉

役所の広報誌である〈カンペールの色〉は、地区の単位での情報を提供するための〈あなたのそばで〉という欄を設けている。

この欄は地区の助役の駐在時間を知らせ、近隣での彼らの役割をはたす場でもある。

2. 市民参加 (課題別対応)

—〈賢人会議〉

2003年9月8日から、役所の会議室で開催されるプロジェクトである。

—〈若者会議〉

若者が参加するスポーツ、教育、文化振興 (DDSEC) のプロジェクトで、2002年7月以後2006年3月までに326の議案が審議された。⁽⁴⁵⁾

—〈情報提供から、公聴・討議へ〉

各種決定に先立ち広報と公聴が実施される。広報・公聴は日常的に、コミュニケーション全般に関して、協会や住民に対して、助役たちにより組織された多数の会合で行われる。(都市計画、道路、緑地、スポーツ施設などが主な対象事業)

3. その他のイニシアティヴ

—〈役所訪問〉

役所が諸制度の知識を蓄えようとする若者を支えるため、市庁舎の訪問を受け入れている。

—〈オンブズマン〉

行政客体 (自然人もしくは法人 association loi 1901) とコミュニ

(45) <http://notes9.mairie-quimper.fr/kportal/conseilq.nsf/KDelib?openform&cas=11&cat=DDSEC&page=1>

当局との間に紛争が起こった場合、オンブズマンが介入する。

カンペールでのオンブズマンの役割は、紛争について和解策を探り、説明、助言、提案することである。

以上が、ジェラルール市長の提示したカンペールの近隣民主主義に関する概要である。他のコミューンでの実態も含めて、改めて考察することにする。

D－財政

ジェラルール市長は、“さまざまな補助金について評価するが、それらの活用方法が複雑であり”、“大規模なコミューンの市長にとっては、精神錯乱の種である”と嘆いていた。市長はまたM 14が“融通の利かない”基準であると指摘していた。市長は、“より大きな財政上の指導力が発揮できるようになり、国が州との間で均衡を守ることをねがう”と言っていたが、理解しにくい指摘である。前半が自主財源の強化の問題で、後半が補助割合の問題であろうか。

E－共同体

“共同体は水、清掃、交通、財政に関与しており”、“予算は、近隣のコミューンへのカンペールの影響力があるため、承認されてきた”ということだが、これについてジェラルール市長は、“他のコミューンの市長が、共同体の諸事業を選挙民に理解させることに成功していない”とつけくわえた。ジェラルール市長の言わんとすることは、単純な方式で大づかみにしか物事を理解し得ない住民の理解力のことを問題とし、その上にたって、市長たちが事業の透明性や情報提供の適切性を図るよう勤めなければならないということであろうか。他方で、“議員たちはプールを利用することには同意するが、その維持・運営費用に同意することには厳しい姿勢でのぞむ”と指摘する。なお、ここでの議員とは、コミューン議員などから構成される、共同体議員のことであろう。当然、共同体内の諸コミューンの中で公共施設の配置、利用便益、負担割合などにもとづく多様な反応があるのであるから、ジェラルール市長はこの調整の難しさについて語っているはずである。“議員たちが関心を向けるのは、事業にもとづく悪

影響であり、また、予定の事業が遅れるのではないかという不安が、事業に関する賛否の表明に影響を及ぼす”というのである。ジェラール市長は、“選挙活動はコミューン内の限定された範囲で行われ、共同体全体にわたるものではない”という意識が、議員たちに持たれているとも指摘した。

共同体の事業運営、議員の関与、コミューン単位での住民の反応に関するジェラール市長の上の指摘は興味深いものであるが、ここでは立ち入れない。

ジェラール市長は環状道路について、貨物自動車への課税を話題としたが、大量輸送に関する施策について国の支援が必要であると期待していた。

ブルターニュ西部地区の問題として、ジェラール市長は TGV を話題にした。“カンペール-ブレストからパリまで現在 3 時間であるが、TGV になればパリからカンペール-ブレストまでは 2 時間になる”とのことであった。ブレストのキャンドル市長も同様の指摘をしていた。

ジェラール市長は、“ナント、レンヌ、アンジェに近接し、連絡の良くなるランドのノートル・ダムでの空港開設計画のために奮闘している”とのことであった。地理的にはレンヌよりやや遠くなるのに誘致に努めているというのは、カンペールやブレストに向かう便数が増えるからであろうか。詳細は不明である。

F-安全・生活の質

“カンペールは海から 20 分の範囲にあり、良い景観に恵まれており、安全に関する問題はさほど重要ではない”というのがジェラール市長の感想であった。カンペールはコミューンの紹介で示したように、なんども洪水に見舞われた経験があるが、対策は十分に講じられたのであろうか。ジェラール市長はまた、“活動を待つてはならず、大臣たちを説得しなければならない”、と言い、“首相の拒否について”問題にした。さらに、“8 月に 17%で”、“仮住まい”を話題にし、“議員が配慮のために気を配っている”と話した。この説明について

は質疑が進まず内容確定が出来ないが、この年にフランス中で起こった、高温による多数の老人の死亡を受けての対策に関わるものであろうか。

G－民主主義の将来

ジェラルール市長は、“議員たちがその責任のおもさにしばしば驚いており”、“彼らに手段を与える必要がある”と述べたが、責任の重さや、手段についての具体的な展開はなかった。市長はまた、“公務員が自分の仕事への責任を欠いている”ことを残念がっていた。フランスの政府構造に関して、“硬直的である”というのがジェラルール市長の見方であるが、内容は示されなかった。他方でジェラルール市長は、“地域に関しては、たとえ政党の違いはあっても、県議会では障害が起こってはいない”と述べていた。

“人々が民主主義のもたらす現実の豊かな意義を自覚するためには、民主主義を失わなければならない”とジェラルール市長は主張するが、逆説的な表現であろう。

ジェラルール市長は極左について、ジョゼ・ボヴェ氏を取り上げた。彼の行動が極左と言いうるかどうかは別にして、ジェラルール市長は、“彼の行動が、メディアで大きく報じられるが、同意できない”ということである。ラルザック台地で20万人がボヴェ氏らの呼びかけに応じて、集まったことがあるとのことであった。これは、軍事施設に反対して、中央山塊にある農民集会の象徴的な土地でおきた、30年ほど前から続く農民たちの活動である。⁽⁴⁶⁾

(46) ジョゼ・ボヴェ Joseph Bové の活動は日本でも良く知られており、京都精華大学などで講演したこともある。その記事がつきにある。

<http://www.kyoto-seika.ac.jp/seika/new/kinenkouen/index3.html>

ジョゼ・ボヴェはアキテーヌ州ジロンド県のタランスで1953年に生まれ、無政府主義、平和主義、非暴力主義に傾倒した。ジョゼ・ボヴェの本来の活動は、自らがロックフォールチーズの生産者であることにも関わって、遺伝子組み換えなどを活用する農業、食品生産に対抗して、伝統的農法、有機農法を訴え、実践することである。1987年に農民同盟 La Confédération paysanne の設立に加わり、2000年から2004年までそのスポークスマンを務めた。『地球は売り物じゃない』、『市民的不服従のために』などの共著がある。ジェラルール市長が

ジェラルム市長は、“国の行政権限を縮小しなければならないのに、分権化にブレーキがかかっており、たとえば学校の運営などに関して州に権限を移行するべきである”と訴えたが、後半については不明な説明である。

ジェラルム市長は、“ヨーロッパは、フランスにとってチャンスをもたらすもので、たとえば自分が尋ねたことのあるハンガリーなどとの協力に信頼感を得ている”と述べた。

ジェラルム市長は上院について、“国民議会とは異なり、現在の選挙方式が継続することを望み”、“6年の任期は適切で、政治的対立関係が強く表れない”と評価していた。

H－国際協力

ジェラルム市長はハンガリーとの姉妹都市関係を取り上げ、“ハンガリーが基盤となる生産物を生産しているが、それらについての評価に関する経験を持たずにいる”と述べた。フィンランドの都市とも交流することになっているとのことであった。ロシア（人）との競争について触れたが、内容は不明であった。また、日本との交流に関して、“多様な用意があり”、“国々はそれらの文化に基づく民主主義がある”と述べた。

(次号に続く)

ボヴェを「極左」と評するのは、本文にある軍事基地拡張反対活動のほか、1999年に、彼が9人の仲間と、居住地近くのミヨーに建設中のマクドナルドを、電動のこぎりなどを用いて破壊するなどの直接行動に訴え、服役したことなどにもよるのであろう。ジョゼ・ボヴェに関しては次のホームページが参考となる。

<http://www.confederationpaysanne.fr/>

<http://www.pouvoir-ouvrier.org/mondialisation/index.html>

<http://www.lexpress.fr/idees/tribunes/dossier/allegre/dossier.asp?ida=423902>

http://fr.wikipedia.org/wiki/Jos%C3%A9_Bov%C3%A9